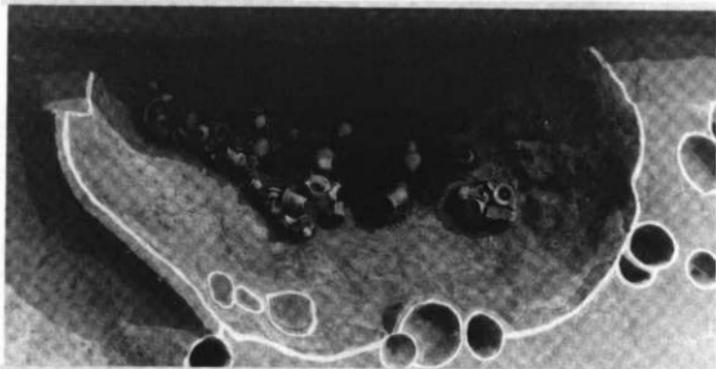


Bトレンチ第2面 BSD-4全景（東から）



Bトレンチ第2面 BSX-2全景（北から）



Bトレンチ第2面 BSX-2土器出土状況（北から）

第41図 東奈良遺跡 (HN06-3) 発掘写真 (7)

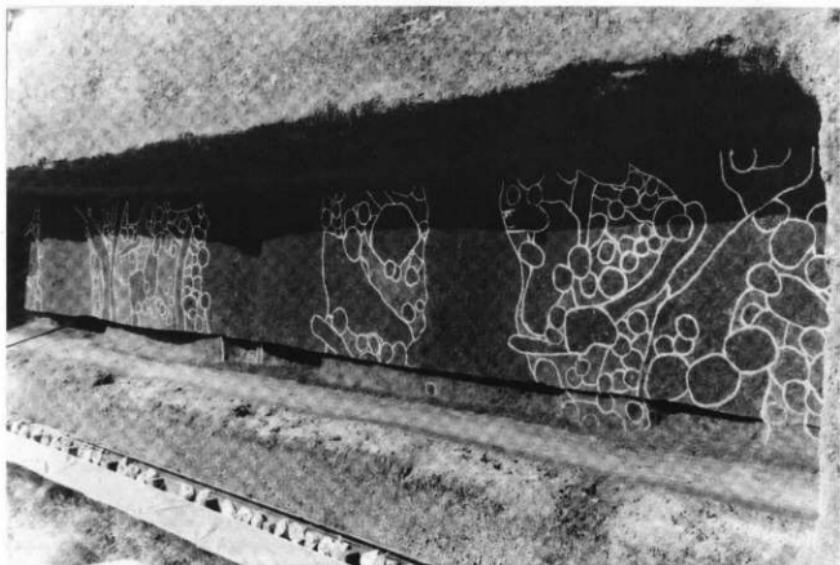


Cトレンチ第1面完掘状況遠景（西から）



Cトレンチ第1面完掘状況全景（東から）

第42図 東奈良遺跡（HN06-3）発掘写真（8）



C トレンチ第2面検出状況全景（西から）



C トレンチ第2面完掘状況全景（西から）

第43図 東奈良遺跡（HN06-3）発掘写真（9）

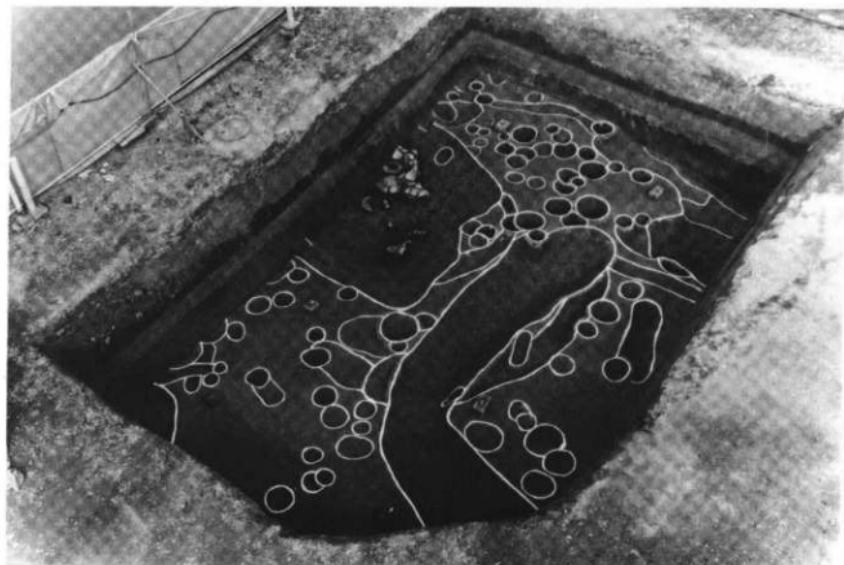


C トレンチ第3面検出状況全景（西から）

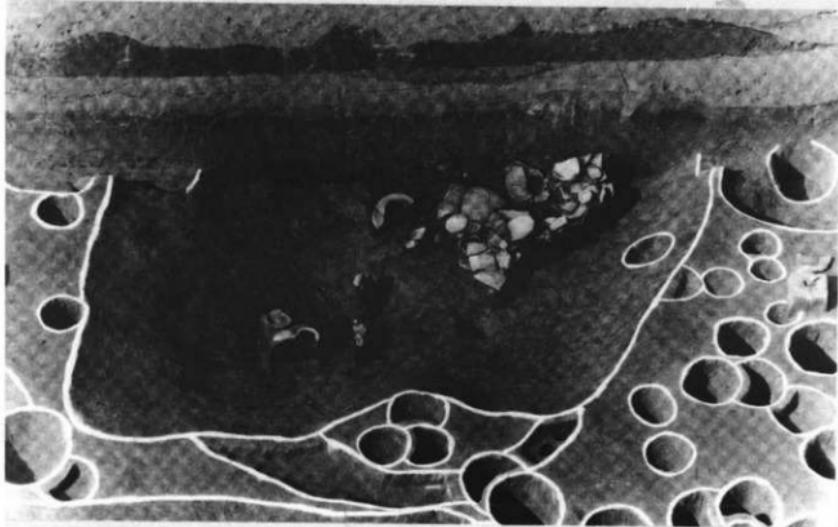


C トレンチ第3面完掘状況全景（西から）

第44図 東奈良遺跡（HN06-3）発掘写真（10）



Dトレンチ第3面完掘状況全景（南東から）



DトレンチDSX-1全景（東から）

第45図 東奈良遺跡（HN06-3）発掘写真（11）

総持寺遺跡

所在地 茨木市総持寺
一丁目380-3他

調査原因 マンション新築
調査期間 平成19年1月16日
～平成19年2月9日

調査面積 203m²

調査担当 黒須 靖之

aはじめに 総持寺遺跡は北摂山地から派生した下位段丘状の「富田台地」と呼ばれる上に立地している。この富田台地は南東方向に緩く傾斜しながら大きく舌状に張り出し、東西約2km、南北約2.5kmの広大な段丘面を形成し、標高は15～30mを測る。遺跡の西側は比高5～6mの段丘崖を介して安威川が造りだした沖積地が広がり、東側は女瀬川・芥川が開析し、同じく南側には沖積平野が広がる。

総持寺遺跡は安威川左岸の富田台地の南西部部分に位置する。

遺跡の範囲は東西約550m、南北約850mで、弥生時代～中世にいたる複合遺跡として周知されている。

b周辺地域 総持寺遺跡が立地する富田台地上の遺跡には、古墳時代になると三島地域を代表する郡家車塚古墳・關鶏山古墳・石山古墳・太田茶臼山古墳（繼体天皇陵）・今城塚古墳などの前方後円墳が築造されている。また、主として太田茶臼山古墳や今城塚古墳に埴輪を供給した新池埴輪製作遺跡が存在し、総持寺遺跡においても方墳を主体とする中期の古墳群に供給されている。さらに飛鳥・奈良時代の律令制下においては、それまで『日本書紀』雄略9年の条にも『三島』と謳われたこの地域は大化の改新を経て奈良時代には嶋上郡・嶋下郡・豊岐郡の3郡に編成される。現在の高槻市と茨木市境は本遺跡の東側に隣接し、少なからず古代の郡界によって影響されている。この前後、太田廃寺跡が創建され塔心礎と舍利容器一式が出土し、地域の有力氏族の氏寺と考えられている。平安時代になると9世紀後半に富田台地の先端部に清和天皇の藏人頭を努めた中納言藤原山蔭が創建したとされる総持寺が建立されている。

c既往調査（第46図）これまでに大阪府教育委員会および財大阪府文化財センター（これより以後は府教委及びセンターと呼称する。）により大規模な発掘調査が近年実施され、総持寺遺跡の全



第46図 総持寺遺跡調査位置図

容および富田台地を中心とする遺跡間同士の関連性などが徐々に明らかになりつつある。当該地周辺（総持寺遺跡・総持寺北遺跡）では既にこれまで60,000m²にも及ぶ発掘調査が実施されている。茨木市では総持寺北遺跡北半部を1995・1996・2001年度に約4,500m²、府教委・センター調査に隣接する総持寺遺跡北東部を2004年度に1,860m²、2005年度に681m²ほど発掘調査を実施している。

茨木市が実施した2004年度調査では古墳時代後期（6世紀）に属する建物跡2棟、飛鳥時代の竪穴住居跡5棟、飛鳥時代～奈良時代を中心とする建物跡16棟、柱列2条、溝、土坑、12世紀後葉～13世紀の建物跡4棟、柵列といった集落遺構が検出された。2005年度調査では飛鳥時代～平安時代前期・後期を中心とする掘立柱建物跡11棟と柱列5条、竪穴住居跡1棟、溝約110条、土坑3基、井戸1基、落込み2ヶ所、柱穴400～500口程の集落遺構が検出されている。

今回の調査区は遺跡南端部にあたり総持寺の山門の南70mほどの所に位置する。周辺では1991年度に西50～90mの箇所で学園建設に伴う発掘調査を1,200m²ほど実施し、弥生時代～古墳時代の溝や柱穴、1995年度には北西30mの箇所で、共同住宅建築に伴う発掘調査を920m²ほど実施し、縄文時代晚期～弥生時代前期・平安時代中期の土坑・建物跡・柱穴を検出している。また、1997年度に南西30mの箇所で、共同住宅建築に伴う発掘調査を200m²ほど実施し、古墳時代の建物跡・土坑・溝・柱穴や平安時代中期～中世の掘立柱建物跡群、2002年度には北に30mの箇所で、共同住宅建築に伴う発掘調査を520m²ほど実施し、古墳時代中期の溝・土坑・柱穴などが検出されている。

府教委が実施した発掘調査では、弥生時代後期後半の土器棺墓・周溝墓といった墓域が段丘崖に接する南先端部分に築かれ、古墳時代前期および後期に尾根筋に竪穴住居主体の集落が営まれ、中期には段丘崖を望む付近に方墳主体の総持寺古墳群が展開する。7世紀前葉～中葉（飛鳥時代）にも竪穴住居が営まれ、奈良時代～平安時代前期には多数の建物跡が検出されている。

センターが実施した1994～1996年度の発掘調査では、飛鳥時代～平安時代中期にかけて建物跡を中心とした集落跡が展開し、断続して鎌倉時代に中世集落として機能している。検出された遺構は建物跡153棟、柵列51条、他に溝・井戸・土坑などがある。センター2002-1調査区では弥生時代後期・飛鳥時代～平安時代中期、平安時代末～鎌倉時代の遺構が検出されている。飛鳥時代では7世紀前葉～中葉頃の竪穴住居を主体とする集落や飛鳥時代～奈良時代の建物跡13棟・柱列が確認されている。センター2003-1調査区では飛鳥時代～平安時代を中心とする建物跡13棟や溝・土坑等が検出されている。

d 調査概要 今回の調査地は総持寺遺跡の南端部、遺跡西側から続く安威川の浸食による沖積面に位置する。現地表面の標高はT.P.10.3m程度で、第1面の検出面の標高はT.P.9.6～9.7m、第2面はT.P.9.5～9.6m、第3面はT.P.9.1～9.2m、第4面はT.P.8.8～9.0mをはかる。

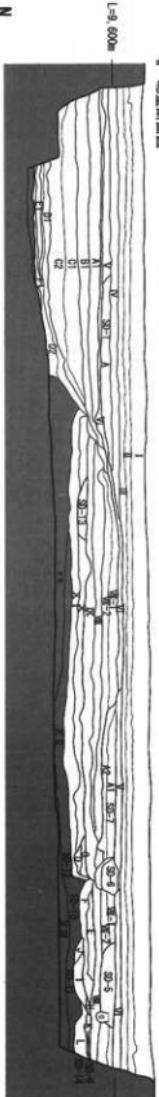
今回の調査では弥生時代前期～平安時代後期までの遺構面が4面確認された。第1面の奈良時代～平安時代の遺構面では東西棟の建物跡、第2面の弥生時代後期～古墳時代の遺構面では幅8m以上におよぶ大溝が検出された。第3面の弥生時代中期の遺構面および第4面の弥生時代前期～中期前葉の遺構面では溝跡を中心に遺構群が検出されている。

出土遺物は第1面の建物跡から奈良時代の須恵器壊身、第2面の大溝から須恵器壺・土師器高壺・壺・甕や板材が出土している。第3面からは弥生時代後期のタタキ甕・壺や磨製石斧・砥石等が出土している。第4面では弥生時代前期～中期の土器片が出土している。さらに下層の遺物包含層からは縄文時代晚期の土器が出土している。

e 基本層序（第47図） 調査区の基本層序はI層～XⅢ層まで大別され、14層に細分される。上からI層が明黄褐色砂壤土の盛土層で層厚0.3～0.4m、II層が灰色シルトの旧耕作土で層厚0.1～0.2m、III層が浅黄色シルトの床土で層厚0.1m、IV層が古代～中世の遺物包含層で灰黄褐色土ににぶい黄橙色シルトを含む。層厚は0.1～0.15mをはかり、調査区西半部にのみみられる。V層は遺物包含層でIV層同様、灰黄褐色土ににぶい黄橙色シルトや多量のマンガンを含む。層厚は0.2mをはかり、調査区西半部にのみ見られる。奈良時代の須恵器高台付壺身が出土している。IV・V層は大溝（SD-8）の埋没過程で、沈下した面に流れ込んだものと考えられる。VI層は遺物包含層で、褐灰色シルトに橙色シルトを含み層厚は0.05～0.25mをはかる。飛鳥時代の須恵器壺蓋が出土している。V・VI層の検出面で第1面の遺構を検出している。VII層は2層に細分され、暗褐色土に褐灰色シルトを含み層厚は0.15～0.3mをはかる。調査区南東部および大溝上面ではVII-1層はみられず、VII層中からは弥生時代後期のタタキ甕が複数および扁平片刃石斧が出土している。VII層検出面で第2面の遺構を検出している。VIII層は黄橙色シルト主体で褐灰色シルトを含み、層厚は0.15～0.25mをはかる。VIII層中からは弥生時代中期の広口壺片が出土している。IX層は暗褐色土主体で黄橙色シルトや褐灰色粘土を含む。層厚は0.1～0.2mをはかり、IX層検出面で第3面の遺構を検出している。IX層中からは弥生時代前期の広口壺片や砥石が出土している。X層は浅黄橙色粘土ににぶい黄褐色シルトを含み、層厚0.2mをはかる。X層検出面で第4面の遺構を検出している。XI層は繩文時代晚期の遺物包含層で、灰白色シルトに多量の浅黄色シルトを含み、層厚は0.1～0.2mをはかる。XII層は自然層で、浅黄橙色シルトに灰白色粘土を含む。層厚は0.2～0.35mをはかる。XIII層は自然層で青灰色シルトである。

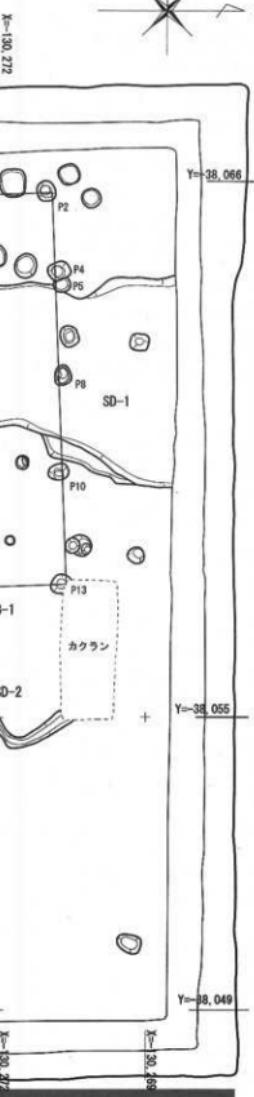
f 遺構と遺物（第47～53図） 第1面では奈良時代～平安時代の遺構を検出している。調査区南半部は搅乱により遺構は検出されなかった。検出された遺構は1間×4間の東西棟を呈する掘立柱建物跡（SB-1）1棟と溝3条、柱穴である。SB-1は主軸N88°E、平面規模は8.0m×2.6m、柱穴の平面形はやや方形気味で堀方は長軸0.32～0.5m、短軸0.3～0.44m、柱痕跡は直径0.15～0.2m、柱の深さは0.3～0.4mをはかる。埋土は褐灰色土に黄褐色シルトブロックや炭化物を含む。重複関係はSD-1を切る。出土遺物はSP-2（柱穴）から土師器皿が出土している。SD-1は調査区西側を南北方向にのびている。全長6.6m～、幅2.7～4.4m、深さ0.1mをはかる。埋土は暗褐色土主体で黄褐色シルトブロックを含む。調査区東側では、SD-2・3がほぼ主軸を同じくし北西～南東方向にのびている。SD-2は北側でL字状に屈曲しており、全長2.7m、幅0.2m、深さ0.15mをはかる。埋土は褐色を呈し、遺物は出土していない。SD-3は全長5.8m～、幅0.35～0.75m、深さ0.2mをはかる。埋土はSD-2同様褐色を呈し、古代の土師器甕の体部片が出土している。

第2面では弥生時代後期～古墳時代の遺構を検出している。第1面同様、調査区南半部は搅乱により遺構は検出されなかった。検出された遺構は溝跡（SD）5条、柱穴である。SD-4～7は第1面で検出されたSD-3と主軸および幅等が近似している。SD-4はやや弧を描きながら、西北西～東南東にのび、全長11.3m～、幅0.65～0.85m、深さ0.5mをはかる。断面形はV字状を呈し、埋土はA～C層の3層に大別され、4層に細分される。A層はにぶい黄褐色シルトに褐灰色シルトを含む。B層は2層に細分され、褐灰色シルト主体、C層は褐灰色粘土に灰黄褐色シルトを含む。出土遺物は弥生時代中期の櫛描平行文や波状文を施文された広口壺やタタキの施された弥生時代後期の甕が出土している。重複関係はSD-5に切られる。SD-5もやや弧を描きながら北側は北東～南西方向、南側は東北東～西南西方向にのびる。全長11.8m～、幅0.6～1.05m、深さ0.45mをはかる。断面形は箱形を呈し、埋土はA～C層の3層に大別される。A層はにぶい黄褐色シ



東堀跡

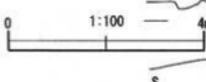
図面番号

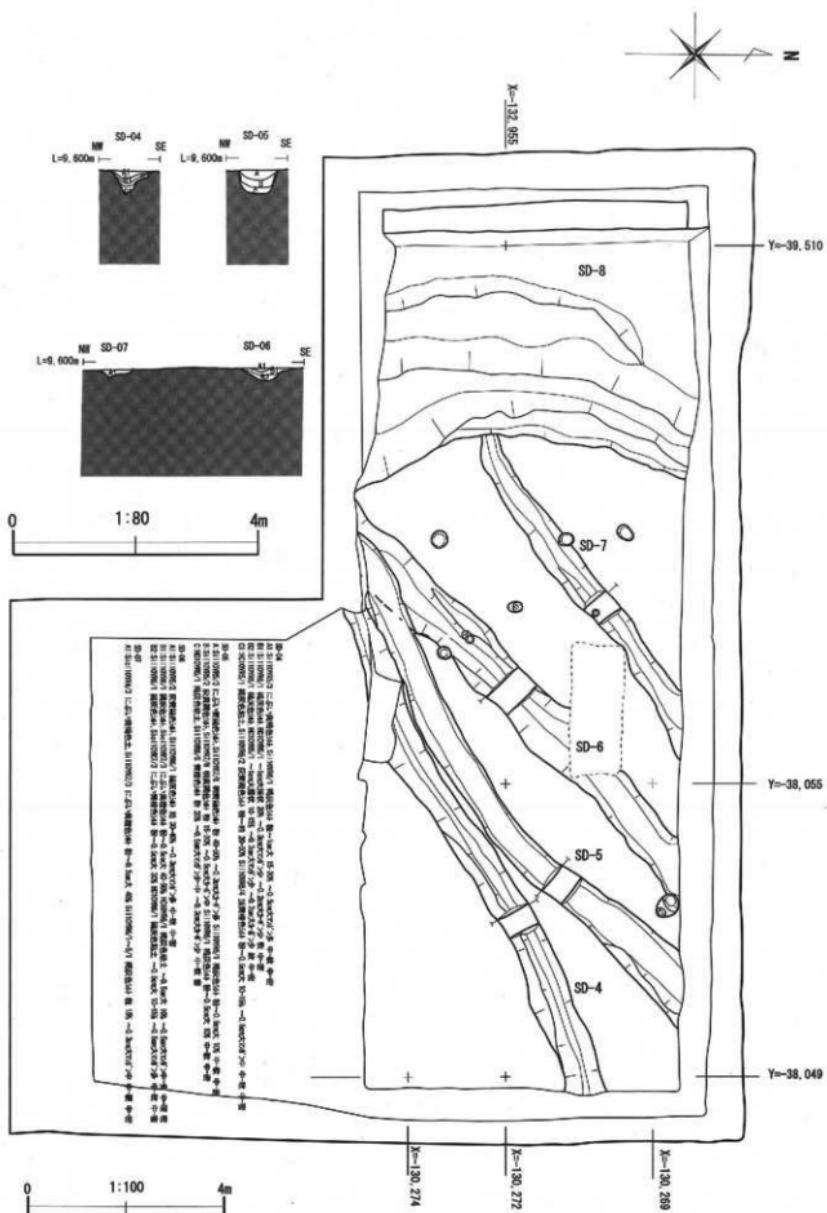


図面番号

図面番号

第47図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 第1面調査区全体図



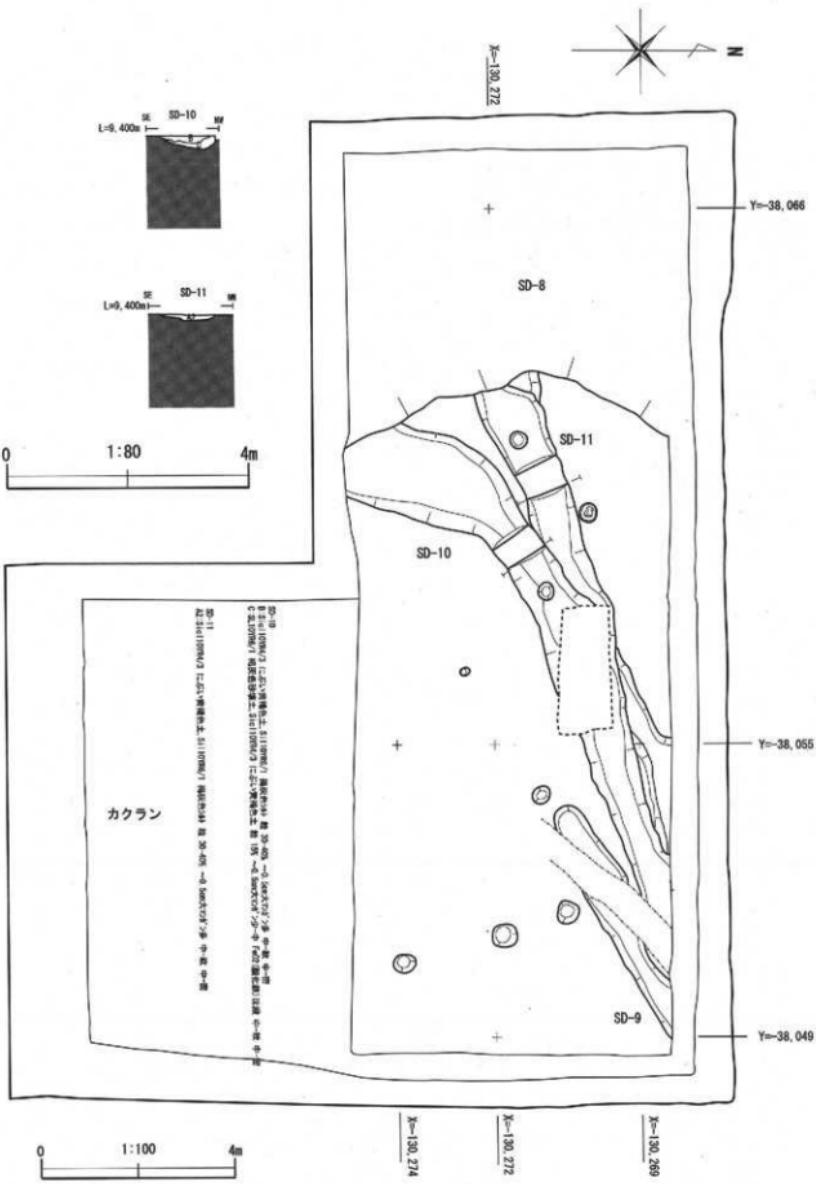


第48図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 第2面調査区全体図

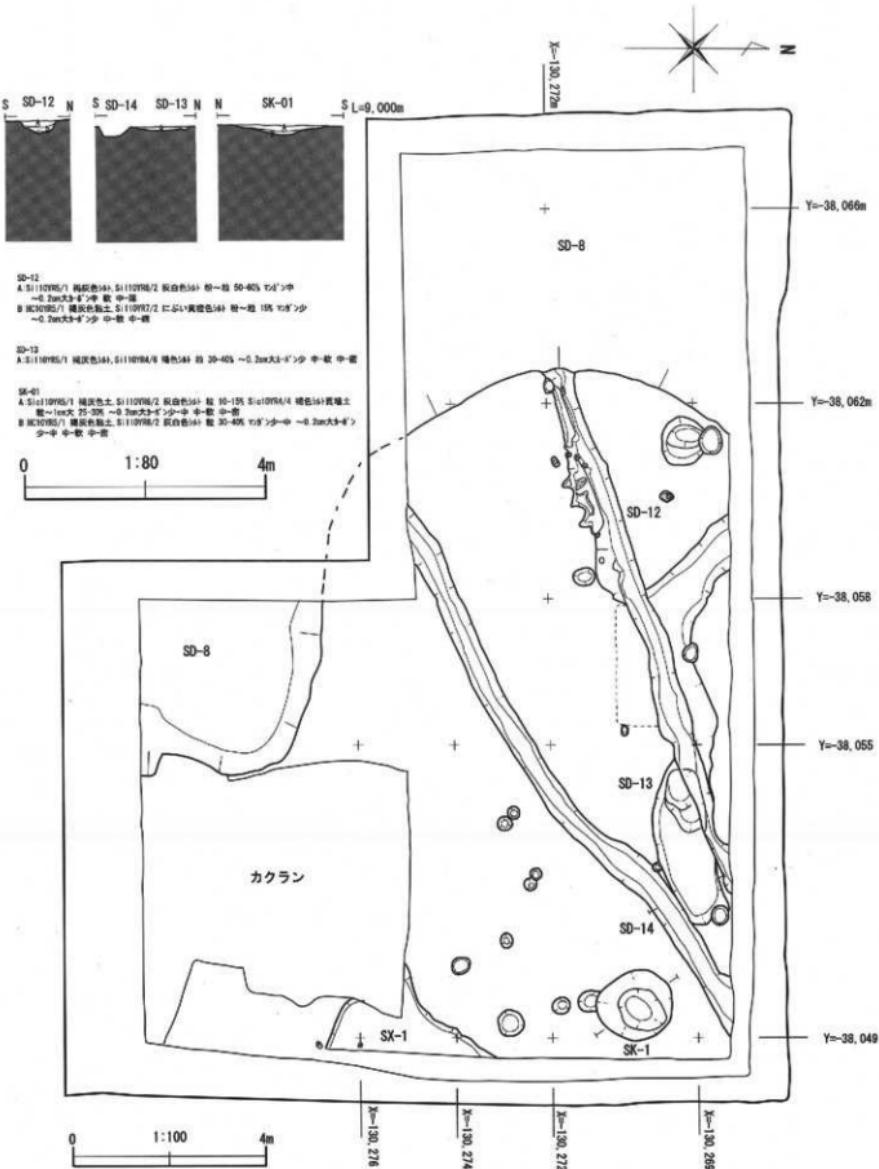
ルトで、B層は灰黄褐色シルト主体、C層は褐灰色粘土に黄橙色シルトを含む。出土遺物は弥生土器の甕が出土し、重複関係はSD-4・6を切る。SD-6は北東—南西方向にのび、全長10.5m～、幅0.8～1.15m、深さ0.24mをはかる。断面形は皿状を呈し、埋土はA～C層の3層に大別される。A層は灰黄褐色シルトで、B層は褐灰色シルトに多量のにぶい黄橙色シルトを含む。C層は褐灰色シルトににぶい黄橙色シルトや褐内色粘土を含む。出土遺物は弥生土器の甕が出土し、重複関係はSD-5・8に切られる。SD-7は北東—南西方向にのび、全長7.8m～、幅0.3～0.7m、深さ0.12mをはかる。断面形は逆台形を呈するものと思われ、埋土はA層のみににぶい黄褐色・黄橙色シルトである。出土遺物は弥生土器の甕が出土し、重複関係はSD-8に切られる。SD-8は調査区西側を南北に通るが、調査区南側で唯一検出された第4面にてSD-8の続きが検出されている。調査区南側では東西方向にのびることから弧を描いていることがわかる。全長約20m～、幅6.8m～、深さ1.4mをはかる。断面形は逆台形を呈すると思われ、溝の西側の壁は調査区外にのびる。埋土はA～F層の6層に大別され、8層に細分される。A層は灰黄褐色シルト主体で、B層は黒褐色粘土ににぶい黄橙色シルトを含む。C層は2層に細分され、黒褐色粘土に明青灰色シルトを含む。D層は2層に細分され、緑灰色砂壤土やシルトに層状の黒褐色土・粘土を含む。E層は緑灰色砂壤土に黒褐色粘土を含む。F層は黒褐色粘土に灰白色粘土を含む。出土遺物は須恵器壺・甕・坏身・蓋・土師器鉢が出土し、重複関係はSD-6・7を切っている。ほかには直径0.2～0.3m程の柱穴が見られ、土師器片が出土している。

第3面では弥生時代中期の遺構を検出している。第1・2面同様、調査区南半部は攪乱により遺構は検出されなかった。検出された遺構は溝跡3条、柱穴である。SD-9～11は第1・2面で検出された溝群と方向性および幅等が近似している。SD-9は調査区東側で検出され、北東—南西方向にのび、全長5.2m～、幅0.5～0.95m、深さ0.32mをはかる。断面形は逆台形を呈し、埋土はA・B層の2層に大別される。A層はにぶい黄橙色シルトに褐灰色シルトを含む。B層は褐灰色シルト～粘土に浅黄橙色シルトを含む。出土遺物はなく、SD-10に切られる。SD-10はやや屈曲しており、北側は東北東—西南西、南側は北北東—南南西方向にのびる。全長13.0m～、幅0.75～1.8m、深さ0.35mをはかる。断面形は逆台形～皿形を呈し、埋土はA～C層の3層に大別される。A層は暗褐色土に多量の褐灰色シルトを含む。B層はにぶい黄褐色土に褐灰色シルトを含む。C層は褐灰色砂壤土ににぶい黄褐色土を含む。遺物は弥生土器の壺・甕片が出土しており、SD-8に切られ、SD-9を切る。SD-11は東北東—西南西方向にのび、全長10.0m～、幅0.95～1.25m、深さ0.3mをはかる。断面形は逆台形を呈し、埋土はA層で2層に細分される。A層はにぶい黄橙色土に暗褐色シルトを含む。遺物は弥生時代中期の壺片を出土し、重複関係はSD-8・10に切られる。柱穴は直径0.35～0.5m程で弥生土器片が出土している。

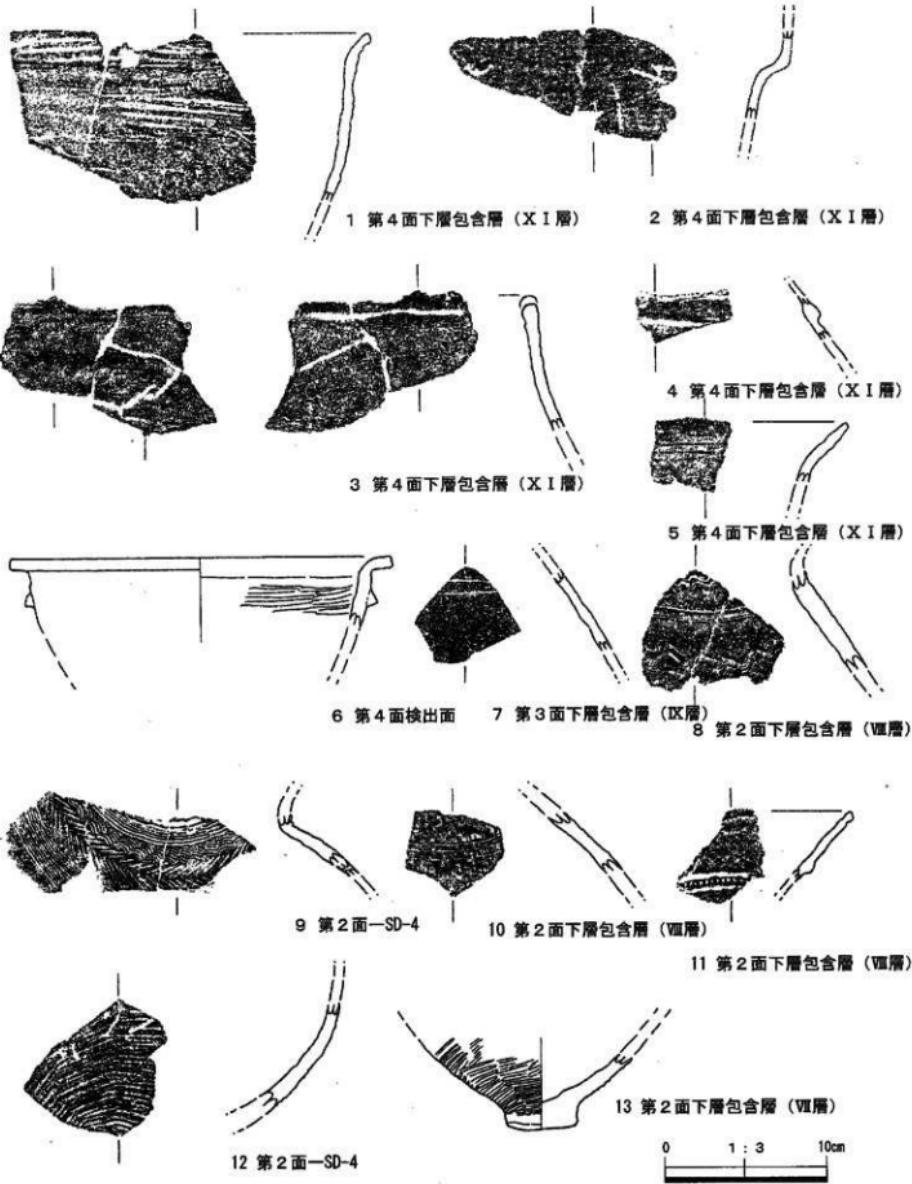
第4面では弥生時代前期～中期前葉の遺構を検出している。ただし、SD-8は第2面の遺構であるが、遺構深度が深いことから、南側調査区で確認された。検出された遺構は溝跡4条、土坑2基、落込み1基、柱穴である。SD-12・14は第1～3面で検出された溝群と方向性および幅等が近似している。SD-12は東北東—西南西方向にのび、全長11.3m～、幅0.45～0.7m、深さ0.3mをはかる。断面形は皿形を呈し、埋土はA・B層の2層で、A層は褐灰色シルトに多量の灰白色シルトを含む。B層は褐灰色粘土ににぶい黄橙色シルトを含む。遺物は弥生時代中期前葉の壺・甕片を出土し、SD-8に切られ、SD-13を切る。SD-13はやや弧を描きながら調査区北側から東西方向にのびる。全長は8.2m～、幅0.8～1.15m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形を呈し、埋土は褐灰色～灰白色シルトである。遺物は石器の剥片や縄文時代晚期～弥生時代前期の土器片



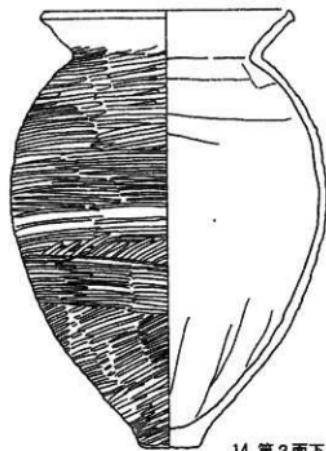
第49図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 第3面調査区全体図



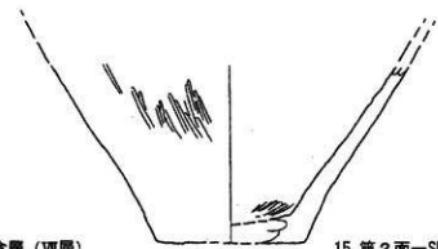
第50図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 第4面調査区全体図



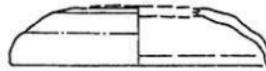
第51図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 出土遺物 1



14 第2面下層包含層（VI層）



15 第2面-SD-8



16 第1面下層遺物包含層（VI層）



17 第1面下層包含層（V層）



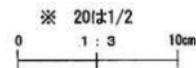
18 第2面-SD-8（下層）



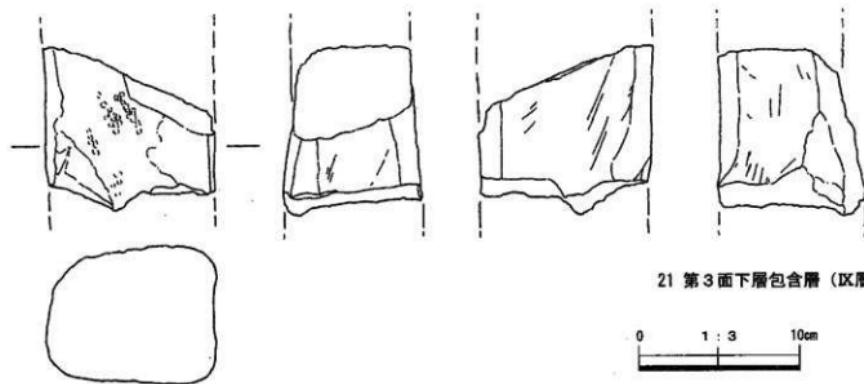
19 第2面-SD-8（A層）



20 第2面下層包含層（VI層）



第52図 総持寺遺跡（SJ06-2）出土遺物2



21 第3面下層包含層（IX層）

第53図 総持寺遺跡（SJ06-2）出土遺物3

目次番号	測定番号	造形	形位	種類	法長			調査		色調		地質	時期	備考		
					口幅	最大幅	厚度	器表 標高記		内面	外面					
										内面	外側	内面	外側			
51 1 3		第4面下層包含層（X I層）	鏡（口）	鏡	-	-	-	10.2 ~	-	-	灰青褐色 ~墨褐	△	O 10	-	長石 1 ~ 4mm 前後多、輪廓後半、厚さ: 0.5 ~ 0.75cm	
51 2 2		第4面下層包含層（X I層）	鏡（口）?	鏡	-	-	-	5.3 ~	-	-	灰青褐色 ~墨褐	△	△ 5	-	(長石・斜長石・石英) 1mm 前後砂粒多、輪廓後半帶文 土織、厚さ: 0.6 ~ 0.7cm	
51 3 1		第4面下層包含層（X I層）	鏡（口）	鏡	-	-	-	8.3 ~	-	-	灰白 - 灰青褐色	△	△ 5	-	(長石・斜長石・石英) 1mm 前後砂粒多、(夾帶文土織)、 厚さ: 0.7 ~ 1cm、口縁部突出 (山形文)	
51 4 5		第4面下層包含層（X I層）	鏡（口）?	鏡	-	-	-	2.4 ~	不明	不明	灰青褐色	△	O 1	-	長石・斜長石 1mm 前後多、(夾帶文土織)、厚さ: 0.3 ~ 0.5cm	
51 5 4		第4面下層包含層（X I層）	鏡（口）	鏡	-	-	-	3.5 ~	-	平行	灰青褐色	△	O 2 3	-	長石 1mm 前後多、厚さ: 0.4 ~ 0.6cm	
51 6 16		第4面鏡山面	鏡（口）平行	鏡	23.0	-	-	4.5 ~	横: 14.0 口: 3.5 幅: 4.5	横: 14.0 口: 3.5 幅: 4.5	灰青褐色	△	△ 3	1-4	長石・石英・斜長石 1mm 前後多	
51 7 6		第3面下層包含層（区域）	広口鏡（体）	鏡	-	-	-	4.9 ~	-	-	(赤褐色 ~墨青褐色) 柱状?	○	○ 2 5	1	黒褐色柱状遺体多、厚さ: 0.6cm	
51 8 10		第2面下層包含層（底層）	広口鏡（体）	鏡	-	-	-	6.0 ~	-	-	灰褐色	○	○ 3	II - 2V	1mm 以下砂粒、厚さ: 1.0 ~ 1.2cm	
51 9 13 SD-4		第2面	広口鏡（体）	鏡	-	-	-	3.7 ~	-	-	青褐色平行文+指紋+矢羽状紋	△	O 3	II - IV	石英・長石 1mm 前後や多、厚さ: 0.6 ~ 0.8cm	
51 10 8		第2面下層包含層（底層）	広口鏡（体）	鏡	-	-	-	3.5 ~	-	-	青褐色平行文 4 条	△	O 1	II - IV	厚さ: 0.7 ~ 0.9cm	
51 11 7		第2面下層包含層（底層）	広口鏡（口）?	鏡	-	-	-	4.3 ~	-	-	斜め溝帶	明黄褐色	△	O 1	V - V	長石・石英 1mm 以上 ~ 2mm、厚さ: 0.4 ~ 0.8cm
51 12 12 SD-4		第2面	広口鏡（口）?	鏡	-	-	-	6.7 ~	平行	9.9 (右上がり)	輪廓平行文 4 条	△	O 3	VI	長石 1mm 以下少、厚さ: 0.75 ~ 1.1cm	
51 13 29		第2面下層包含層（底層）	糸縫型（底 土織）	鏡	-	-	-	4.5 ~ 4.5 ~	5.5 ~	平行	青褐色 ~灰白色	-	O 15	VI	1mm 前後砂粒や少し多 (長石・石英・斜長石)、外周部黒 あり	
51 14 22		第2面下層包含層（底層）	糸縫型（口 一致）	鏡	(16.0) (底層)	3.8	26.8 ~	平行	9.9 ~	9.9 ~	青褐色 ~灰白色	△	O 10	VI - 3 V - 3	(長石・斜長石) ~ 5mm 大や多、端部多付着 (楕円形), 2.5mm前後 \"透視糸縫型\" (透視糸縫法)、<「」の字型織目付 出し手足	
51 15 19 SD-8		第2面	広口鏡（底層）	鏡	-	-	-	(9.0) ~	10.8 ~	~ 15.5 ~	灰白 - 淡青褐色	△	O 15	IV 不明	1mm 前後 (長石・石英・斜長石)、外周部黒	
51 16 17		第1面下層包含層（V層）	糸縫型糸縫型(5.5cm 付手舟)	鏡	-	-	(3.8)	-	-	9.9 ~	灰白 - 淡青褐色	△	O 20 (II - 5)	7c 代	黒褐色柱状遺体少	
51 17 18		第1面下層包含層（V層）	糸縫型糸縫型(舟)	鏡	-	-	-	14.1 ~	3.5 ~	9.9 ~	灰白	△	O 10 4c 代半 (W-34)	灰白色微多		
51 18 14 SD-8		下層	糸縫型糸縫型(舟下)	鏡	-	-	-	5.7 ~	青褐色 ~灰白	平行 9.9 ~	9.9 ~	青褐色 ~灰白	○	○ 3	5c 代	黒褐色柱状遺体少、厚さ: 0.75cm
51 19 15 SD-8		A層	糸縫型糸縫型(舟下)	鏡	-	-	-	9.1 ~	青褐色 ~灰白	平行 9.9 ~	9.9 ~	青褐色 ~灰白	○	5c 代?	大颗粒あり、厚さ: 0.8 ~ 1.0cm	
51 20 11	-	第2面下層包含層（底層）	扁平刀石 舟	刀石	-	-	-	-	-	-	灰白 - 灰褐色	-	-	-	磨削石舟、長さ: 3.5cm ~、幅: 3.7cm、厚さ: 1.3cm、重 量: 96g、舟: 1.5cm、舟底: 1.0cm、舟幅: 3.5 ~ 10.6cm、 舟高: 7.3 ~ 8.4cm、重量: 355g、舟底欠損	
51 21 21	-	第3面下層包含層（底層）	板石	板石	-	-	-	-	-	-	灰白	-	20 25	-		

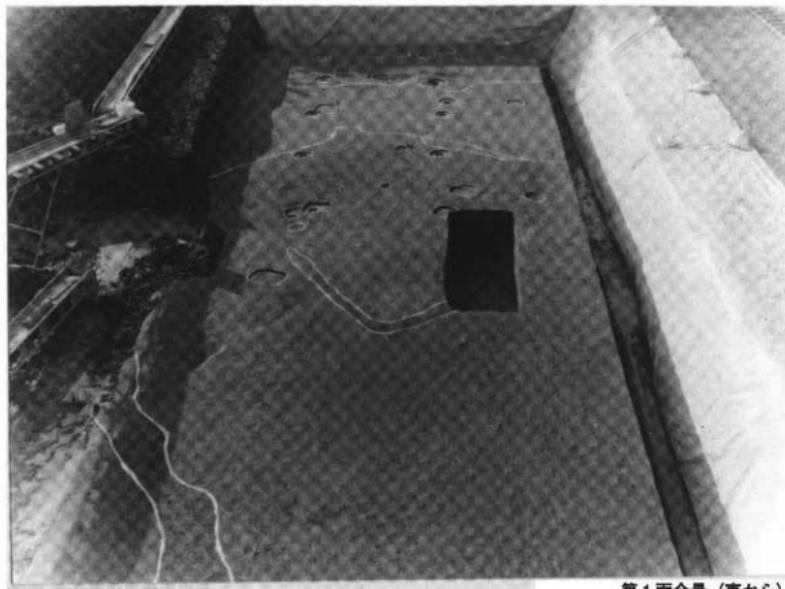
が出土し、重複関係はSD-12に切られる。SD-14は東北東－西南西方向にのび、全長12.7m～、幅0.45～0.9m、深さ0.25mをはかる。断面形は逆台形を呈し、遺物は縄文時代晩期～弥生時代前期の甕片が出土している。SK-1は調査区北東に位置し、平面形は楕円形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、直径1.4～1.6m、深さ0.2mをはかり、埋土はA・B層の2層に分かれる。A層は褐灰色土主体で、B層は褐灰色粘土に多量の灰白色シルトを含む。遺物は弥生時代前期の壺・甕片等が出土している。柱穴は直径0.2～0.3m程の小規模なものが多く検出されている。

第4面下層包含層（第51図）からは縄文時代晩期の深鉢の口縁部が出土している。1～5は突帯文や山形文がみられるが、いずれも破片のみで全体の形をなすものはない。色調は灰黄褐色～黒褐色を呈し、砂粒が多く含まれる。

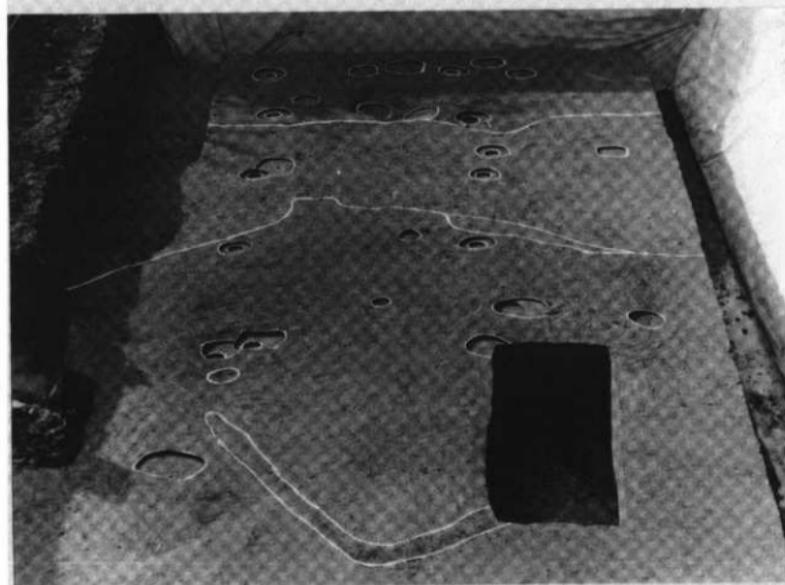
まとめ 今回の調査地は総持寺遺跡の南端および富田台地の先端に位置する段丘崖下の沖積面にあたる。前述した府教委やセンターが大規模に発掘調査を実施した台地上洪積面とは様相が異なっている。しかし、近年市教委による周辺の発掘調査事例が増えたことにより、段丘上との関連性が少しづつではあるが明らかになりつつある。また、段丘崖が台地先端部をすべて囲っているわけではなく、遺跡南東部は緩やかな扇状地形を呈している。今回、調査では弥生時代～古墳時代・古代の溝跡を中心とした遺構群が多数確認されたが、そのいずれもがおおよそ、東北東－西南西にのびており、まさに扇状地形で緩やかな斜面に向かって溝がのびているのである。台地上の遺跡中心部では、調査事例が少ないこともありまだ不明な点が多いが、こうした発掘調査の積み重ねによって次第に明らかになっていくものと思われる。さらに、縄文時代晩期の遺物が出土したのは今回の調査で2例目となり、総持寺遺跡の沖積面では市内で最も古い時期から人々が生活していたことをうかがわせた。また、周辺調査でもわかるように検出遺構に平安時代中期～中世にかけての建物跡などが多いこともあげられ、眼前にある総持寺との関連にも注目される。

参考文献

- | | |
|-----------------------------------|--------------|
| 1995 「総持寺遺跡発掘調査概要」 | 大阪府教育委員会 |
| 1997 「総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」 | 大阪府教育委員会 |
| 2004 「総持寺遺跡」「大阪府埋蔵文化財調査報告2004-2」 | 大阪府教育委員会 |
| 2006 「総持寺遺跡Ⅱ」「大阪府埋蔵文化財調査報告2006-5」 | 大阪府教育委員会 |
| 1998 「総持寺遺跡」「センター調査報告書 第30集」 | 現跡大阪府文化財センター |
| 2004 「総持寺遺跡Ⅱ」「センター調査報告書 第117集」 | 現跡大阪府文化財センター |
| 1997 「平成8年度発掘調査概報」「総持寺北遺跡」 | 茨木市教育委員会 |
| 2002 「平成13年度発掘調査概報」「総持寺北遺跡」 | 茨木市教育委員会 |
| 2003 「平成14年度発掘調査概報」「総持寺遺跡」 | 茨木市教育委員会 |
| 2005 「平成16年度発掘調査概報」「総持寺遺跡」 | 茨木市教育委員会 |
| 2006 「平成17年度発掘調査概報」「総持寺遺跡」 | 茨木市教育委員会 |

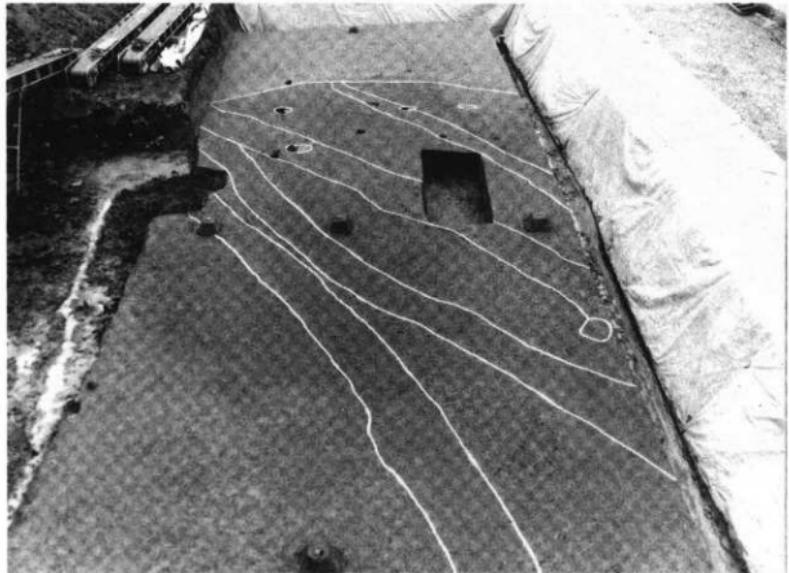


第1面全景（東から）



第1面建物跡全景（東から）

第54図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 発掘写真 (1)



第2面検出状況全景（東から）

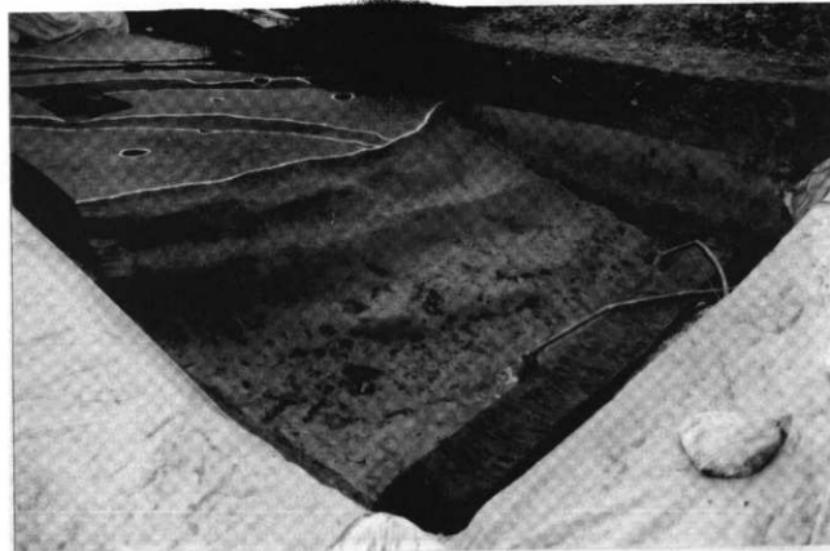


第2面完掘状況全景（東から）

第55図 総持寺遺跡（SJ06-2）発掘写真（2）



第2面完掘状況全景（南西から）



第2面 SD-8 (大溝) 全景 (北西から)

第56図 総持寺遺跡 (SJ06-2) 発掘写真 (3)

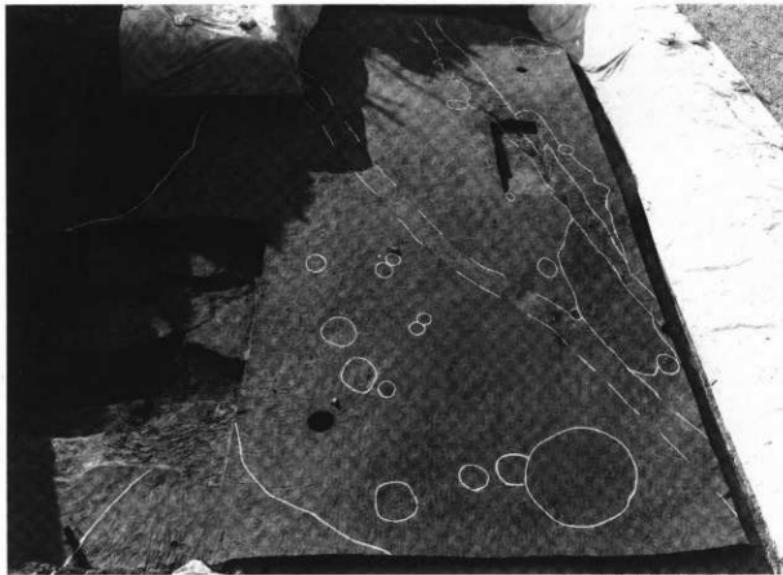


第3面検出状況全景（東から）

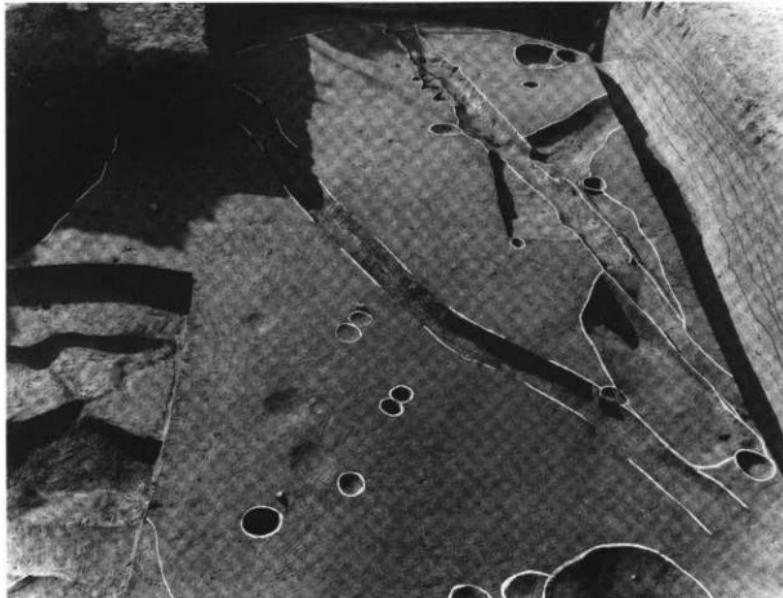


第3面 完掘状況全景（東から）

第57図 総持寺遺跡（SJ06-2）発掘写真（4）



第4面検出状況全景（東から）



第4面 完掘状況全景（東から）

第58図 総持寺遺跡（SJ06-2）発掘写真（5）



調査区北壁断面全景（南東から）



SD-8（大溝）北壁断面（南から）

第59図 総持寺遺跡（SJ06-2）発掘写真（6）

郡 遺 跡

所 在 地 茨木市上穂積四丁目137

調査期間 平成18年12月13日

～平成19年1月18日

調査面積 420m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果 郡遺跡は 北の山地部から流れる勝尾寺川と佐保川が合流して茨木川となる右岸の郡、上穂積、畠田一帯に広がる標高10m前後に位置する弥生時代から奈良時代に至る複合遺跡である。また遺跡の西側は標高約80mの千里丘陵が延び、その麓には南北に旧亀岡街道が通っている。この千里丘陵麓の上穂積地域からは飛鳥時代の軒丸瓦や軒平瓦が出土している事から、7世紀後半頃の穂積庵寺跡の可能性を示唆している場所でもある。

今回の調査地は、民間企業の旧倉庫跡地であることから、建物基礎による搅乱が予想された。また現地表面から旧耕土まで約2mの盛土がされていたため、掘削深度がかなり深くなることとなった。

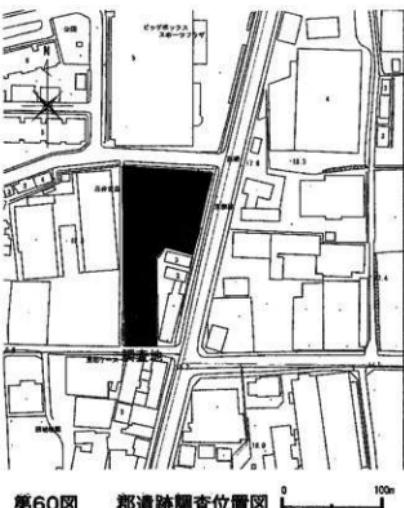
調査の結果、層位は約2mの盛土の下に旧耕土が約0.2m、床土約0.07mの厚さで堆積しており、その下層に古墳時代から奈良時代の遺物を含む茶褐色粘土層の包含層が約0.1mの厚さで堆積していた。この包含層を取り除くと、淡黄色の粘土層が広がり生活面（遺構面）となっている。遺構としては、不定形の柱穴や土塙のほか、2間×2間の掘立柱建物跡1棟が検出された。この掘立柱建物跡は、南北方向に主軸を置き、1辺0.65m、深さ約0.3mの隅丸方形の柱穴が、柱間0.23m間隔で検出されている。

不定形の土塙は、自然地形の窪みとも考えられるが若干人工的な掘り込みも見られることから、何らかの遺構と考えられる。

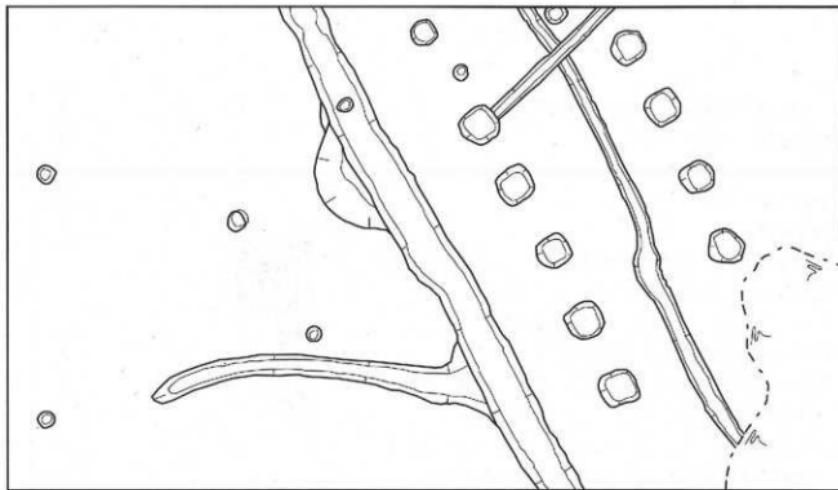
その他の柱穴は、直径0.1m～0.2m前後のものであるが規則的なまとまりがなく、建物跡の柱穴とは考えられないものである。

遺物としては、一部後代の搅乱も見られるため一定しないが、基本的には飛鳥時代～奈良時代の土師器や須恵器片と少量の瓦片が出土している。しかし掘立柱建物の時代の決め手となる遺物の出土はなかった。

これまでの周辺の調査や今回の調査結果から、立派な掘立柱建物跡が検出されたこと、生活面が一定していること、出土遺物の時期がほぼ飛鳥時代～奈良時代であること等から、島下郡衙の一部である可能性が高い地域であることが伺えるものである。



第60図 郡遺跡調査位置図



第61図 郡遺跡（KH07-1）調査区平面図



第62図 郡遺跡（KH07-1）調査写真

上中条遺跡

所在地 茨木市駅前四丁目7-83

調査理由 共同住宅建設

調査期間 平成19年8月21日

～平成19年10月6日

調査面積 420m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果 上中条遺跡は、市街地中心部の、駅前・上中条一帯に広がる標高10m前後の旧茨木川右岸に位置している。遺跡の中心は今回の調査区から北側に広がると考えられるが、既往の調査から、遺跡は古墳時代中期から後期にかけての人々の足跡がみられ、郡遺跡や東奈良遺跡といった拠点集落から分村化した集落と考えられる地域である。

調査は敷地内に2ヵ所の調査区を設けて実施したが、近接していることから全く層位に変化は見られないため、同一のものとして報告することとした。

今回の調査地は、民間企業の旧倉庫跡地であることから、既設建物による搅乱が予想されたが、盛土及び旧耕土の掘削後には、一部で旧基礎の搅乱が見られたものの、全体的には地山面（生活面）は残っていた。

調査の結果、層位は約0.9mの盛土の下に旧耕土が約0.25m、床土約0.1mの厚さで堆積しており、その下層に古墳時代の遺物を含む茶褐色粘土層の包含層が約0.2mの厚さで堆積していた。この包含層を取り除くと、黄色の粘土層が広がり生活面（遺構面）となっている。

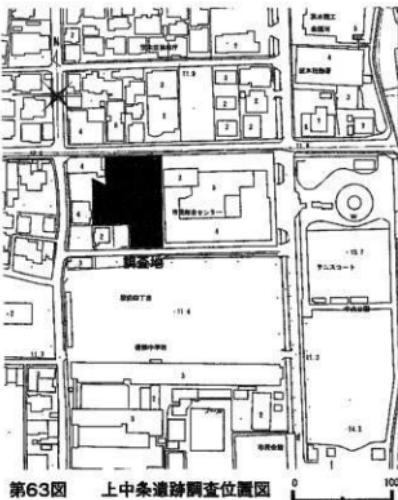
遺構としては、幅0.1～0.25m、深さ0.05～0.15mの溝6条を検出した。これらの溝は後世に削平されたことから非常に浅い溝であり、出土遺物も土師器の細片のみであった。

また、径0.2～0.35mの比較的しっかりとした柱穴が数穴検出されたが、その位置関係はまとまりのないものであり、建物跡の柱穴とは判断しにくいものであった。

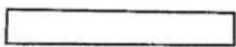
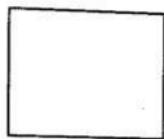
遺物としては、一部後世の搅乱も見られるため一定しないが、基本的には古墳時代の土師器や須恵器片である。しかし溝や柱穴の時期決定となる遺物の出土はなかった。

今回の調査から、上中条遺跡の南端にあたるこの地域は、この遺跡の南側に隣接する駅前遺跡と同様、分村化した小集団が一時に生活場所として占地したと考えられる。

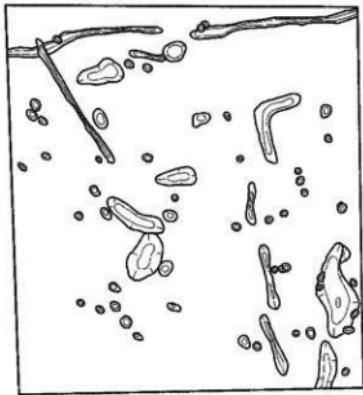
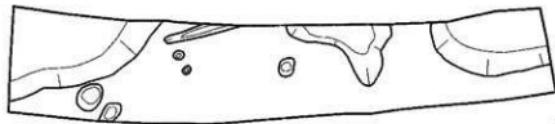
また、古墳時代（5～6世紀）にこの地域に小集落が営まれていたことを裏付け、この頃の旧茨木川右岸における集落の広がりと分村化を示す貴重な資料となる調査であった。



第63図 上中条遺跡調査位置図



第64図 郡遺跡 (KC07-1) 調査区配置図



0 5m

第65図 郡遺跡 (KC07-1) 調査区平面図

東奈良遺跡

所在地 茨木市若草町279-1ほか

調査理由 マンション新築工事

調査期間 平成19年10月15日

～平成19年11月15日

調査面積 約 240m²

調査担当 中東 正之

調査結果

経過 東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。その遺跡範囲は、南北約1.2km、東西約1kmが周知されている。その中心部は、弥生時代前期から古墳時代前期の環濠集落である。集落城は、阪急京都線とJR貨物線（旧国鉄貨物線）が交差する付近を中心にして半径150m程の範囲である。近年、環濠集落東半部にあたる東奈良三丁目地区において、区画整理事業等に伴う発掘調査が相次ぎ、弥生時代前期の6～7条、同中期の5～6条の環濠が彌る全容が明らかとなってきた。これに対し、本調査地の位置する、環濠集落の西半部にあたる若草町地区は、これまで調査例が少なかった。既往の調査によると、若草町地区的環濠は東側とほぼ相似に廻り、地形的には近畿自動車道下に埋没する谷地形を以て集落城の終端となっていることなどが判明している。当地については集落西端部にあって、幕域および最外縁を廻る環濠の推定域となっており、その検出を目的に調査を実施した。

遺構と遺物 基本層序は、概して耕作に関わる土地改変によって形成された層序である。上層より第Ⅰ層の現耕土および床土で約0.3m、第Ⅱ層の灰黄色系粘質土(3層に分かれる耕作関連土)約0.3m、第Ⅲ層の褐灰色シルト混粘質土(中世遺物含む耕作関連土)および黄灰色粘質土(床土と思われる耕作関連土)約0.15m、第Ⅳ層の暗褐色粘質土(弥生時代中期の包含層／第1検出面T.P.7.7m付近)約0.1m、第Ⅴ層の明黄褐色粘質土(地山層／第2検出面T.P.7.6m付近)となる。以下、主な遺構を概説する。

第1検出面は整地面である。溝1条、土塙1基、柱穴・ビット約110口を検出したが、柱穴類は、掘立柱建物としてまとめるることはできなかった。出土遺物は細片が多く時期比定は困難であるが、平安時代中期が中心となるものと思われる。主な遺構としては、土師器杯と黒色土器A類椀が出土したSP-45がある。底面に円形縦板組枠痕跡が残る小型井戸上面から掘込まれた隅丸方形のビットである。井戸共に完掘すると、上面1m×0.8m、底面0.65×0.6m、深さ0.55mを測る。埋土は、植物遺体の混じる灰色粘土などの井戸埋土2層と、船底形に堆積する地山ブロックの混じる褐灰色粘質土などの土塙埋土3層で、土器は主に土塙の底面にあたる層位から出土した。

第2検出面は、弥生時代中期の遺構を中心とするもので、環濠1条、溝9条、方形周溝墓2基、土塙墓1基、土塙10基、柱穴・小穴約50口を検出した。

SD-2は、調査区の東辺に沿って検出長24m、幅2.8～3.3m、底面幅0.7～1m、深さ1.2～1.5mを測り、環濠であると考えられる。狭く平坦な底面は北から南に下り、二段の堀形にV字形に近い

逆台形の断面形を呈する。埋土は14層ほどに分かれるが、出土する弥生土器や堆積状況から、開削時から一旦の埋没までの下層（畿内Ⅱ～Ⅲ様式）と、埋没後に掘形内を約0.7mの深さで流れ上層（畿内Ⅳ様式）にわけられる。SD-3は、環濠とSX-3南辺に重複し、これらより新しい浅い溝である。西端部で大きく広がる溝幅は1.8～3.5m、深さ0.25～0.4mを測る。流れは判然としないが、微地形に従えば南東から北西に向かう流路である。埋土は4層に分かれ、古墳時代後期の土器片が出土した。

SD-2の東側では、方形周溝墓とみられる周溝群を検出している。これらは西側が調査区外に至るため全容は不明ながら、上塙墓であるSK-7を囲うように廻るSX-1・2と、近接するSX-3がある。SK-7は東西0.8m、南北1.8m、深さ0.4m程度を測る堀形内に、長さ1.1m、間隔0.4mの木棺両側板の痕跡が確認できた。埋土の状況から底面から約0.2mの位置に底板が存在したとみられるが、両木口板や蓋板とともに痕跡すらなかった。土塙墓を覆う盛土は、SX-1の台状部の痕跡とみられるが、後世の整地が及ぶため判然としない。SX-1は、南辺周溝をSX-3と共に、東辺はSK-8と重複、これに先行する。北辺は中央で途切れるように廻る。内法で南北4.5m、周溝は幅0.8～1.5m、深さ0.15～0.4mを測る。SX-2は、その東辺の両端がSX-1周溝と接しており、溝幅約1m、深さ0.2～0.4mを測る。SX-3は、内法で南北4.5m、周溝は幅0.5～1m、深さ0.3～0.45mを測る。北辺をSX-1と共に、南辺はSD-3と重複する。いずれの周溝も同方向を示し、埋土内から弥生時代中期後半を主体とする土器片が出土している。

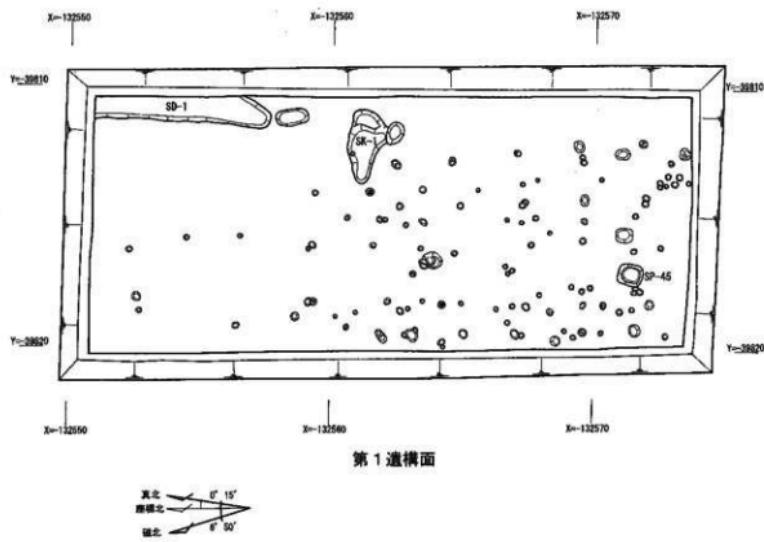
SK-8は、SX-1東辺と重複するもので長軸5m、短軸1.8m程、深さ0.5mを測る。埋土内からは、中層より横転した形で畿内Ⅳ様式の壺が出土している。SK-2は、調査区北西隅に位置する大型土塙である。調査区外に至るため全容は不明であるが、東西4.8m、深さ0.9mを測る。埋土内からは弥生時代後期の土器片が出土している。

出土遺物は、コンテナパッド10箱を数える。弥生時代中期の壺、瓶、鉢、高杯など土器類の破片が大半を占める。他には、古式土師器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器などがある。

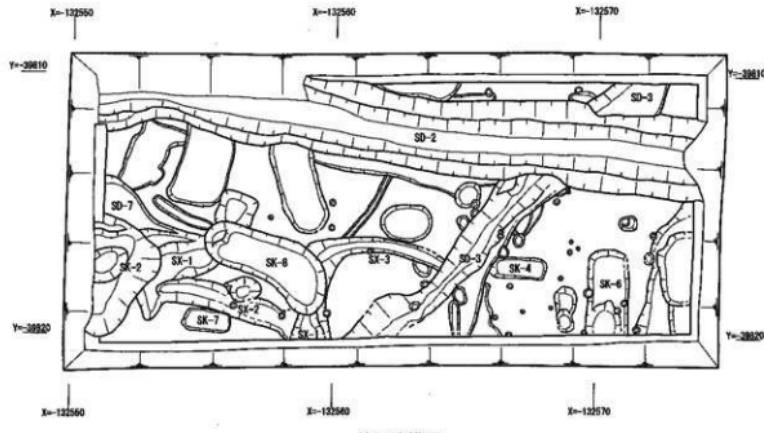
小結 環濠と考えられるSD-2は、底部が狭くV字形に近い防御的な断面形や出土遺物、外側に方形周溝墓が存在することなどから、若草町地区の既往の調査例のうち、本調査地の60m北東に位置する、JR貨物線の昭和52年調査地IB地区の溝-15と同一の溝であると判断される。溝-15の外側は、弥生時代後期の溝-16を挟んで、方形周溝墓（畿内Ⅳ様式）が構築されている。東奈良三丁目地区においても、弥生時代中期の環濠は5～6条が確認されており、そのうち最外縁を廻る溝がこれに該当するとみられる。これらの溝は、いずれも外側が墓域となっており、弥生時代中期の環濠集落外縁部の状況を示していると考えられる。

方形周溝墓群は、ともに内法で4.5m程度と比較的小規模の周溝を有する一群であるが、その全容は判然としないものであった。時期は、SD-2上層と同時期頃とみられるが、周溝からの出土土器は細片が多く、指標となるべき土器（供獻土器）は捉えられなかった。むしろSK-8の出土土器（畿内Ⅳ様式）が、供獻土器然とした出土状況を呈しているため、これを方形周溝墓の一部とみるべきとも考えられる。

参考文献 茨木市教育委員会「東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告」
東奈良遺跡調査会「東奈良（大阪府茨木市）発掘調査概要Ⅱ」



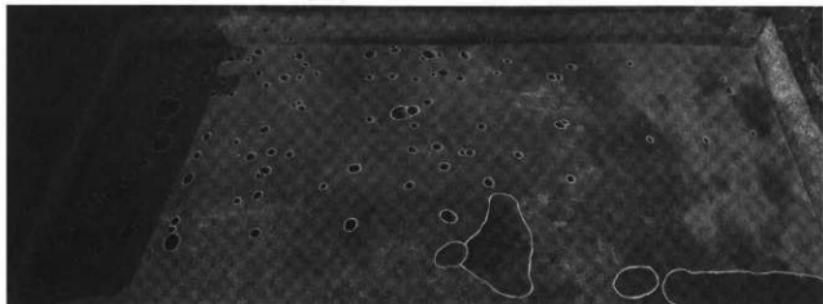
第1造構面



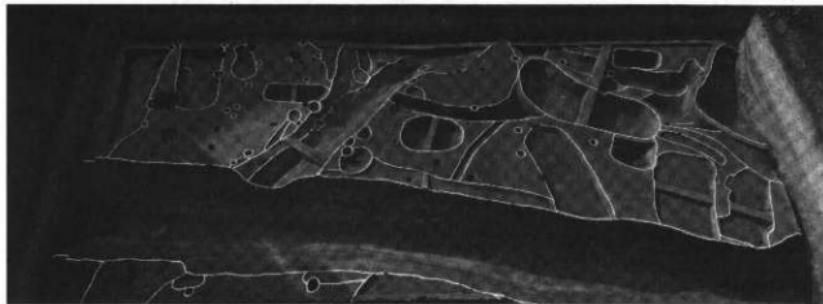
第2造構面



第67図 東奈良遺跡造構平面図



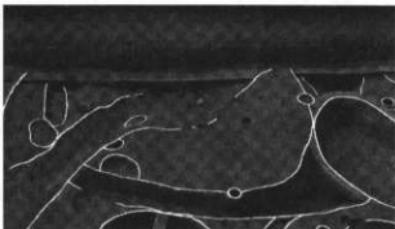
第1造構面（東から）



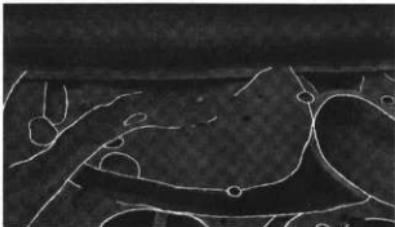
第2造構面（東から）



SD-2（北から）



SX-3（東から）



SK-7とSX-7（東から）

第68図 東奈良遺跡完掘状況

東奈良遺跡

所在地 茨木市小川町967-2ほか

調査理由 マンション新築

調査期間 平成19年10月29日

～平成19年12月1日

調査面積 480 m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果

aはじめに 東奈良遺跡は茨木市南部の標高6～8mの沖積平野上に位置し、地形的に北西から南東方向に向かって緩やかな傾きを持ち、約南北1.2km、東西1kmの遺跡の広がりを持っている。弥生時代～中世にいたる複合遺跡で、弥生時代前期の拠点的集落として周知されている。東奈良遺跡からは重要文化財の銅鐸鋳型や鋳造関連物の出土があり、近年では小銅鐸や破鏡・儀仗形木製品等の出土がある。今回の調査地は遺跡の北端部に位置し、中条小学校遺跡との境目にあたる。環濠集落が広がる遺跡中心部に比べると、遺構密度は希薄になるが、遺跡の境界部の様相を知る重要な調査である。

b周辺地域と既往調査（第69図） 遺跡の北側は中条小学校遺跡と重複しており、弥生時代中期～中世の複合遺跡として周知されている。東奈良遺跡と重複する地域では弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃（庄内式併行期）の円形周溝・方形周溝・溝・土坑等や古墳時代中期～後期の円墳や方墳、古代（飛鳥～平安時代）の掘立柱建物跡群等が検出されている。今回の調査地周辺では、1974年度に南西120mの箇所で共同住宅建設にともない420m²程の発掘調査を実施し、弥生時代後期の土塙墓群約20基、1980年度には南西50mの箇所で300m²程の発掘調査を実施し、古墳時代の溝や柱穴を検出している。1982年度には西へ20mの箇所で私立幼稚園の建設にともなって320m²程の調査を実施し、古墳時代および中世の溝や柱穴、1984年度には南へ80mの箇所で共同住宅建設にともなって200m²程の調査を実施し、弥生時代～古墳時代の溝・柱穴を検出している。1985年度には南に隣接する箇所で共同住宅建設にともなって420m²程の調査を実施し、弥生時代の方形周溝墓を検出している。1987年度には北西70mの箇所で共同住宅建設にともなって115m²程の調査を実施し、弥生時代～古墳時代の溝や柱穴を検出している。1990年度には西へ60mの箇所で共同住宅建設にともなって220m²程の調査を実施し、古墳時代中期・中世の溝・土坑・井戸・柱穴、2000年度には北に100m程の箇所でマンション建設にともない700m²の調査を実施し、



第69図 東奈良遺跡調査位置図

200m

弥生時代後期の方形周溝墓2基や古墳時代中期の古墳・竪穴住居・井戸・土坑・柱穴等を検出している。

以上のように、今回の調査地周辺の発掘調査の状況について一部取りあげて概要を記述した。それによると、今回の調査地である東奈良遺跡北端部では今回の調査地南側では弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃の方形周溝墓群や土塙墓群といった墓域が広がり、調査地西側では古墳時代や中世の溝・柱穴といった集落遺構が展開していることがうかがえる。

c 調査概要(第69図) 今回の調査地は遺跡北端部にあたるが、調査地の東隣に南北にはしる小川水路があり、これまでの調査成果から、この小川沿いに地形段差が存在することがわかつており、この小川が弥生時代においては小河川として機能していたものが現在に至るまで踏襲されてきたと推測されている。今回の調査に至る事前の試掘調査においても、調査区の小川沿い付近では青灰色粘土・粗砂で湧水著しいものであったことから、申請地の西側で確認された部分を今回の調査区に設定している。

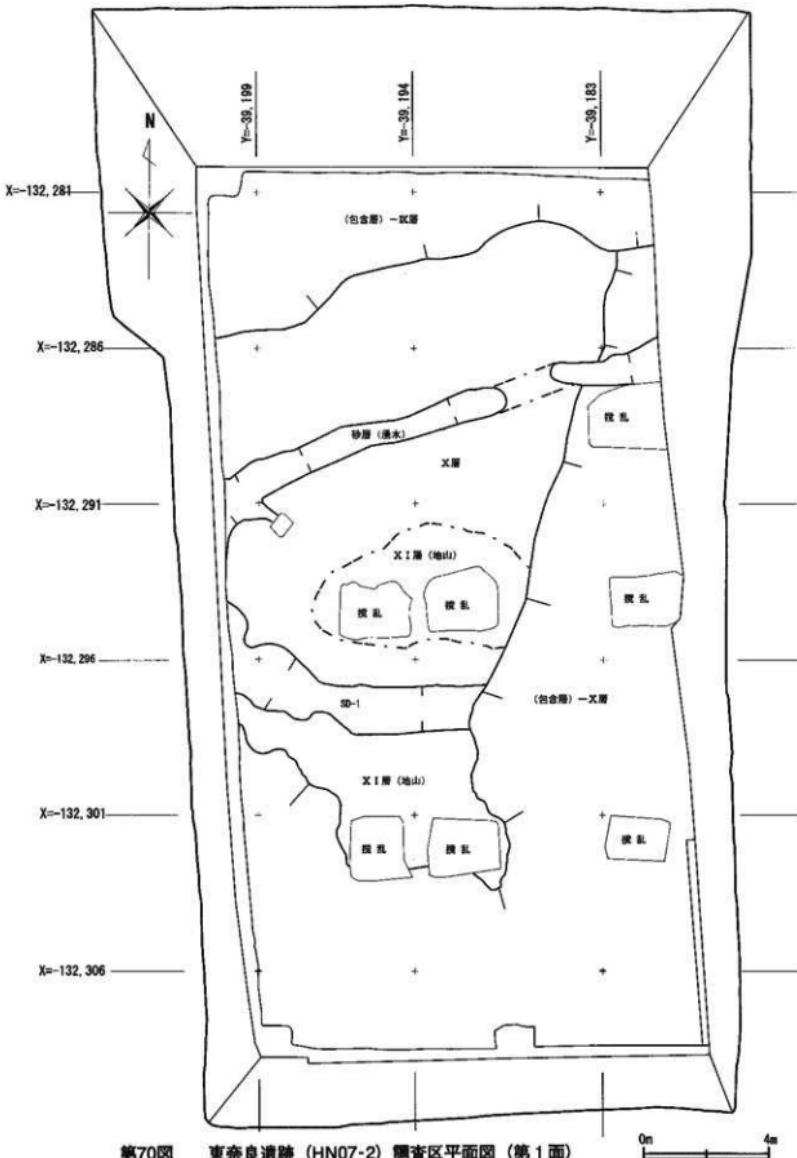
現地表面の標高は北側でT.P.10.9m、南側でT.P.9.6mをはかり、第1面の検出面の標高は北西部T.P.7.6m、北東部T.P.7.5m、南西部T.P.7.3m、南東部T.P.7.2m、第2面の標高は北部T.P.7.3m、南西部T.P.7.1m、南東部T.P.7.0mをはかる。このことから、若干北西から南東方向に向かって緩い傾斜になっている。

今回の調査では古墳時代中期～奈良時代および中世の遺構が確認され、第1面の中世遺構面では東西方向の溝跡や古墳時代～中世の遺物を含む中世遺物包含層、第2面では古墳時代中期～中世の溝11条、土坑4基、落込み1基、柱列(S C)2条、柱穴150口ほど検出している。

出土遺物は遺物包含層からの出土がほとんどで、須恵器坏身・蓋・高台付坏身・有蓋高杯・鉢・瓶・壺・甕や瓦器・土師器皿などが出土している。

d 基本層序(第70・71図) 調査区の基本層序はI層からX I層まで大別されるが、15層に細分される。I層は黄褐色土の盛土で、層厚1.2～2.6mをはかる。II層は黒褐色土主体の近現代の耕作土で、層厚0.1～0.7mをはかる。III層は2層に細分され、明オリーブ灰色シルト主体で、層厚0.1～0.4mをはかる。IV層も2層に細分され、オリーブ灰色シルトに多量の灰白色砂壤土や酸化鉄を含む。(河川堆積)層厚は0.1～0.3mをはかる。V層も2層に細分され、橙色砂壤土に褐灰色シルトや酸化鉄を含む。(河川堆積)層厚は0.1～0.4mをはかるが南側の堆積が厚くなっている。VI層も2層に細分され、褐灰色砂壤土やシルト・粗砂・砂礫等を含んだ層で調査区中央部にみられる。この層は東西方向にのび湧水があることから、小河川の堆積と思われ、層厚は0.4mをはかる。VII層は青灰色粘土主体で、層厚0.1～0.2mをはかる。VIII層は褐灰色土に多量のブロック状のにぶい黄橙色シルトを含み、層厚0.1～0.2mをはかる。IX層は古墳時代～中世の遺物を含む中世遺物包含層で、にぶい黄褐色土に多量の褐灰色シルトを含み、層厚0.1～0.2mをはかる。X層も古墳時代～中世の遺物を含む中世遺物包含層である。暗灰色粘土主体で灰白色シルトや粘土、明褐色シルトを含み、層厚0.2mをはかる。XI層は地山で、黄橙色粘土や灰白色粘土である。このXI層検出面で第2面の古墳時代～中世の遺構を検出している。

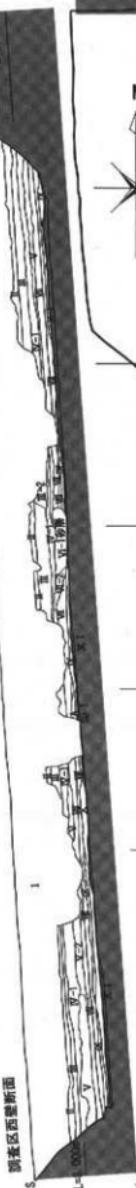
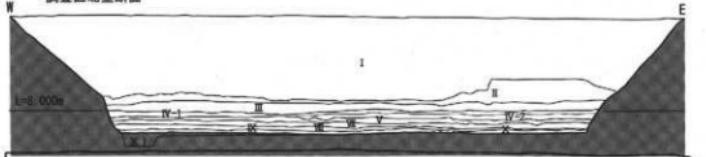
e 遺構と遺物(第70～72図) 第1面では中世遺構および古墳時代～中世の遺物を含む中世遺物包含層を検出している。検出された遺構は調査区中央に東西方向にのびる溝1条で、全長8.0m、幅1.5m、深さ0.2mをはかる。埋土は褐灰色土主体で、にぶい黄橙色シルトブロックを含み、遺物は出土していない。遺物包含層は北西～南東方向の傾斜に薄く堆積しており、にぶい黄褐色土(X層)や暗灰色粘土(X層)が堆積する。この遺物包含層から出土した遺物(第72図)は、1



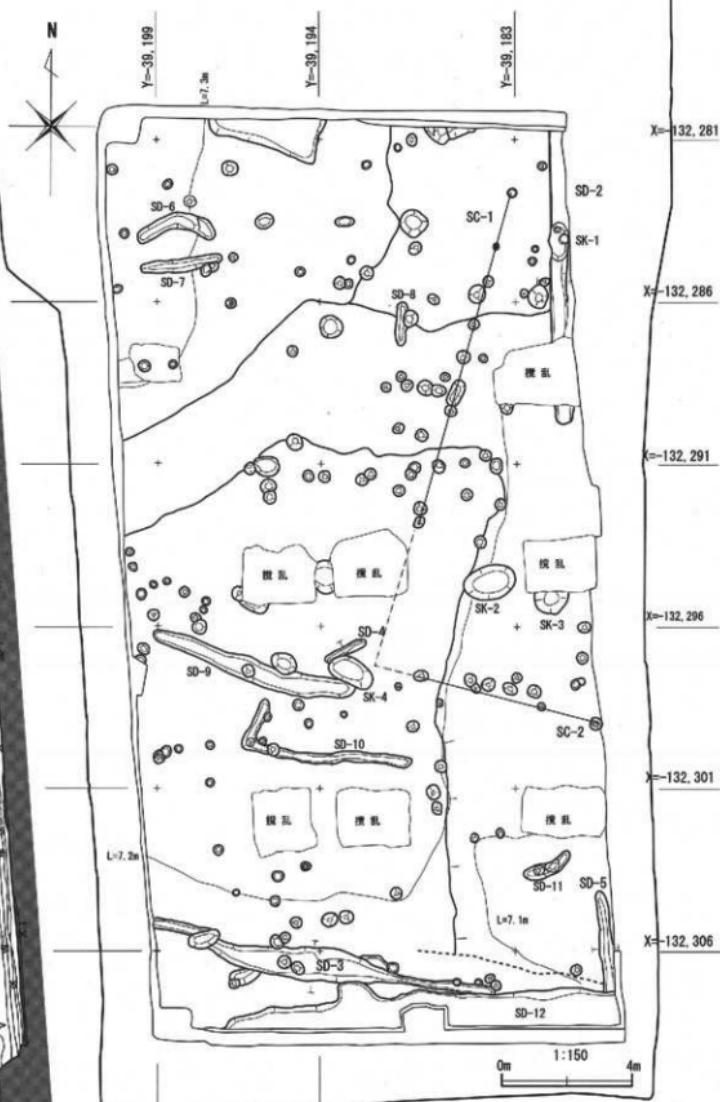
第70図 東奈良遺跡 (HN07-2) 調査区平面図 (第1面)

基本層序 I (底土)

- I : HN07-0 黒色粘土. S110706/2 固青褐色(少) 粉~0.5mm少 20% ~1mm+4-5mm少 中-軟 中-密
- II : S11071/1 明け少 黑色(少) S11071/2 黑~2% 反色少+黃土 粉~1mm 大 15~20% ~2mm大+少 中-軟 中-密
- III : S110701/1 7-7 灰色少+黃土. S110701/2 黄白色砂質土 粉~1mm 大 30~40% 粉 中-薄
- IV : S110701/1 7-7 灰色少+黃土. S110701/2 灰灰色少 0.5~3mm大礫化鉄 0.5mm大+少 中-軟 中-密
- V : S110701/1 7-7 灰色少+黃土. S110701/2 灰灰色少 0.5~3mm大礫化鉄 0.5mm大+少 中-軟 中-(2mm少)-河床面
- VI : S110701/1 7-7 黑色少+黃土. S110701/2 黑色少 0.5~3mm大礫化鉄 0.5mm大+少 中-軟 中-密
- VII : S110701/1 黑色少+黃土. S110701/2 黑 15% S110701/2 0.5mm大礫化鉄 0~3mm大+少 中-軟 中-密
- VIII : S110701/1 黑色少+黃土. S110701/2 に少く黄褐色少 粉~30~40% 粗粒少+4-5mm少 中-軟 中-密
- IX : S110705/3C-3D 黃褐色土. S110705/1 南灰黑色土 粉~40% 40% S110705/2 黄褐色少+黃土 粉~0.5mm大礫化鉄 0.2~0.5mm大+少 中-軟 中-密
- X : HN07-0 綠灰黑色粘土. S1-HN07-0 白灰色少+粘土. S17-S18/2 黃褐色少+少 0.5mm大礫化鉄 0~2mm大+少 中-軟 密 (包含層)
- XI : HN0705/6 黃褐色粘土. HN0705/1 黄白色粘土 粉 25~30% 中-硬 密



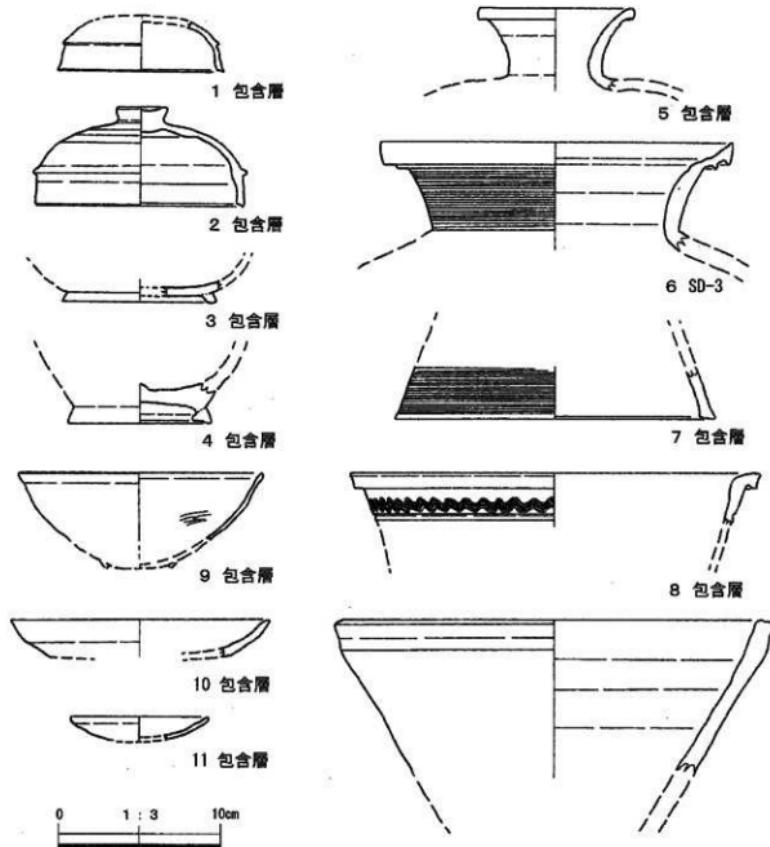
第71図 東奈良遺跡(HN07-2)調査区平・断面図(第2面)



が須恵器壺蓋、2が須恵器有蓋高壺の蓋、3は須恵器高台付壺身、4は須恵器長頸瓶底部、5は須恵器瓶の口縁部、7は須恵器器台？、8・12は須恵器鉢、9は黒色の色がとんでいる瓦器楕、10・11は土師皿である。須恵器は古墳時代中期～後期・奈良時代(3・4)で、9～11の土器は13世紀後葉～14世紀中葉頃のものと思われる。

第2面では古墳時代中期～中世の遺構を検出している。溝は11条検出しているが、基本的に東西方向と南北方向を基調とするものが多い。SD-2は調査区北東端およびSD-5は調査区南東端で検出され、それぞれの全長は9.0m～と3.1m～、幅は0.5mと0.3～0.5m、深さは0.2mをはかり、埋土は暗褐色～黒褐色土主体である。この二つの溝は当初はつながっていたものと思われる。削平を受け現状の形を呈していると考えられ、遺物の出土はない。重複関係はSD-2がSK-1に切られる。SD-3は調査区南側で西北西～東南東方向にのび、全長10.8m～、幅0.3～1.0m、深さ0.15mをはかる。埋土は黒褐色土を主体とし、遺物は古墳時代中期の須恵器甕の口縁部が出土している。重複関係はSD-12に切られる。SD-12は調査区南端で東西方向にのび、全長12.2m～、幅1.2m～、深さ0.2mをはかる。埋土は褐色～暗褐色土で出土遺物はない。土坑は4基検出しているが、いずれも楕円形を呈し長軸1.2～1.6m、短軸0.6～1.0m、深さ0.2～0.4mをはかる。埋土は暗褐色土で出土遺物はない。SC-1は調査区北東部で検出され、主軸N11°Eで、6間、全長10.6m、間尺1.7～1.8m、それぞれの柱穴は円形を呈し直径0.25～0.5m、深さ0.2～0.3mをはかる。SC-2はSC-1の南側でほぼ直角方向に検出され、主軸はN75°Wで3間～、全長5.5m～、間尺1.7～1.8m、それぞれの柱穴は円形を呈し直径0.25～0.4m、深さ0.2～0.3mをはかる。SC-1・2の柱穴からは13世紀後葉～14世紀中葉頃の土器片が出土している。また、SC-1とSC-2は軸や柱穴規模等も近似していることから、同一建物であった可能性がある。他には柱穴が約150口検出しているが、おおよそ円形を呈し直径0.2m前後の小柱穴が多数を占め、また、直径0.3～0.5m、直径0.6～0.7mをはかるものがある。いずれも掘立柱建物跡や柱列を構成するものと考えられる。

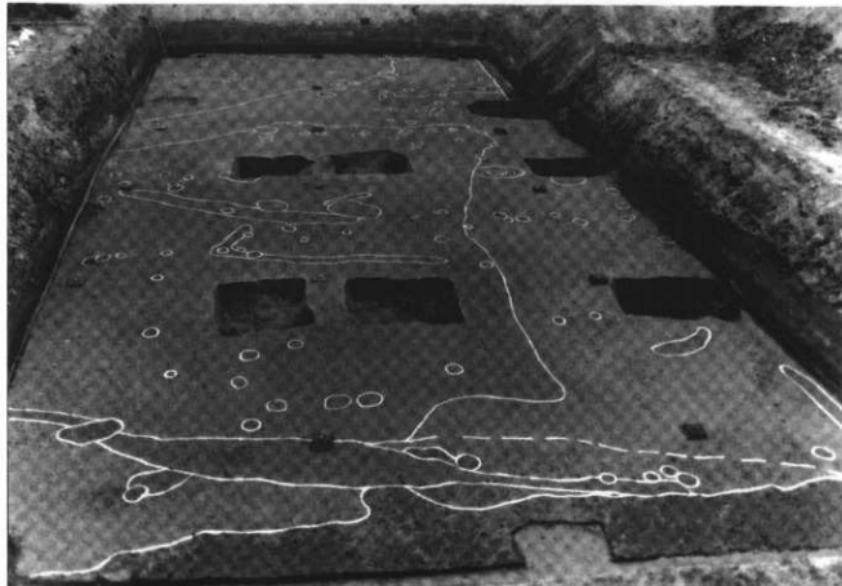
†まとめ 今回の調査では古墳時代中期～中世にかけての溝や柱穴等の集落を構成する遺構が検出された。前述した東奈良遺跡の北端に位置する今回の調査地の南側では、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃の方形周溝墓群や土塙墓群といった墓域が広がっていたが、調査地西側では古墳時代や中世の溝・柱穴といった集落遺構が展開していた。今回の調査結果と照らし合わせると、後者の調査地西側の状況と一致していることがわかる。弥生時代前期から続く環濠集落をとりまく墓域はどうやら弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃にかけて、今回の調査地の南60mほどのところで一区切りされ、その北側では古墳時代中期～後期にかけてあらたに土地利用を行っており、また、時を経て、中世に集落として土地利用が再開されている。以上のことを踏まえ、この土地利用状況から推察すると、当該地は集落を営むのに不安定な土地であったことが考えられ、その要因として、おもに隣接する小川や元茨木川による河川浸食であったことが容易に想像される。中世になってこの要因が克服または影響が薄れたことから、安定的な土地利用を図ることができたものと思われる。



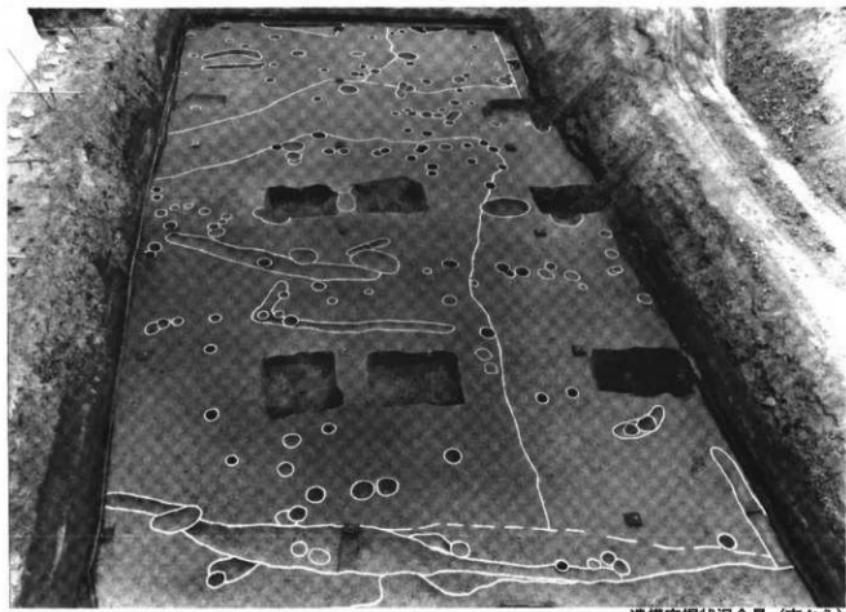
第72図 東奈良遺跡 (HN07-2) 出土遺物

12 包含層

目 次 番 号	実 測 標 号	遺構	層位	種類	基準	法 量		調 査		色 調		地 質 成 分	積 層	時 期	備 考
						口 径	大 径	底 面	圓 周 長 度	内 面	外 面				
72. 1	3	包含層	X層	唐物器	片蓋	10.0	-	-	3.0 890	灰白	灰	○ ○	5	~ 6c 前半	0.2mの白色砂粒含
72. 2	8	東西部包含層	X層	唐物器	有蓋盒- 瓢	12.5	-	-	6.0 970目	灰白	灰白	○ ○	50	5c 後半	0.2 ~ 4mの白色砂粒含、底径: 3.1cm, H105 ~ TE43
72. 3	5	包含層	II層	唐物器	高台付舟形	-	-	9.4	1.4 970	灰白	灰白	○ ○	15	5c 後半	0.2 ~ 1mの白色砂粒含
72. 4	6	包含層	X層	唐物器	長頸瓶	-	-	8.05	2.4 890	灰白、瓶底・鋸止み切板	灰白 ~灰	○ ○	10	6c 後半	0.2 ~ 1mの黒白色砂粒含
72. 5	2	包含層	II層	唐物器	瓶	9.4	-	-	5.0 970目	灰白	灰白	○ ○	5	6c 後半	0.6 ~ 1mの緑灰・白色砂粒含
72. 6	7	SD-2	A層	唐物器	瓶	21.4	-	-	9.6 970目	灰白	灰白	-	-	10c 後半	
72. 7	4	包含層	X層	唐物器	器合?	-	-	19.3	3.2 970	暗青灰	暗青灰	○ ○	5	~ 6c 末	0.3 ~ 0.5mの黒白色砂粒含
72. 8	1	包含層	X層	唐物器	杯	14.8	-	-	3.2 970目	深灰大、沈羅	灰	○ ○	6	5c ~ 6c 後半	0.2mの白色砂粒含
72. 9	10	東奈良包含層	II層	瓦器	褐(色)C'	15.0	-	-	4.0 ~970目	灰白	灰白	○ ○	5	中世Ⅱ	0.1mの白色砂粒含、瓦器類(急折形態) 土附器多枚
72. 10	11	東奈良包含層	II層	土器類	盆	15.7	-	-	2.25 97"	灰白	灰白	○ ○	5	中世Ⅰ	97%砂粒
72. 11	12	東奈良包含層	II層	土器類	盆	8.35	-	-	1.4 97"	淡黃白	淡青灰	○ ○	10	中世Ⅱ	97%砂粒
72. 12	8	東西部包含層	X層	唐物器	鉢?	25.4	-	-	9.6 970目	灰	灰	○ ○	5 ~ 6c?	0.3 ~ 1mの黒白色砂粒含 0.3 ~ 1mの白色砂粒含	

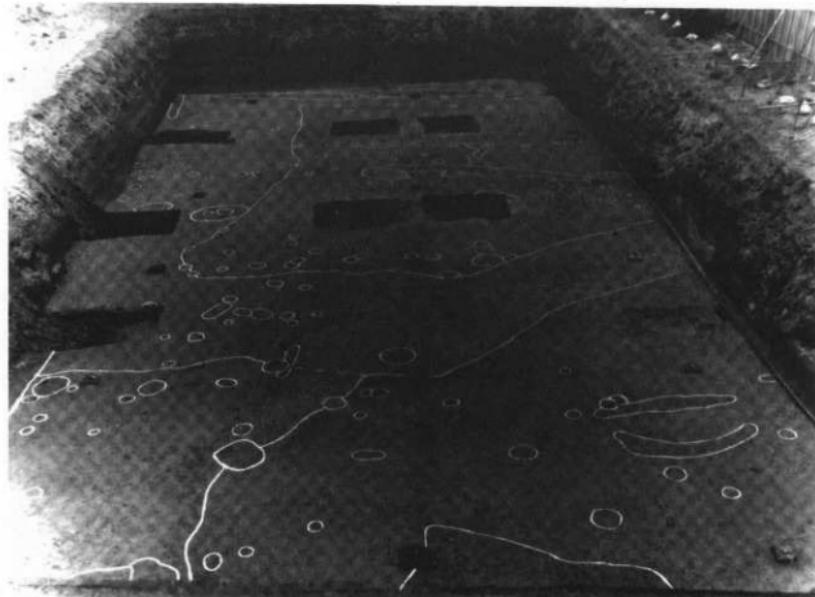


遺構検出状況全景（南から）

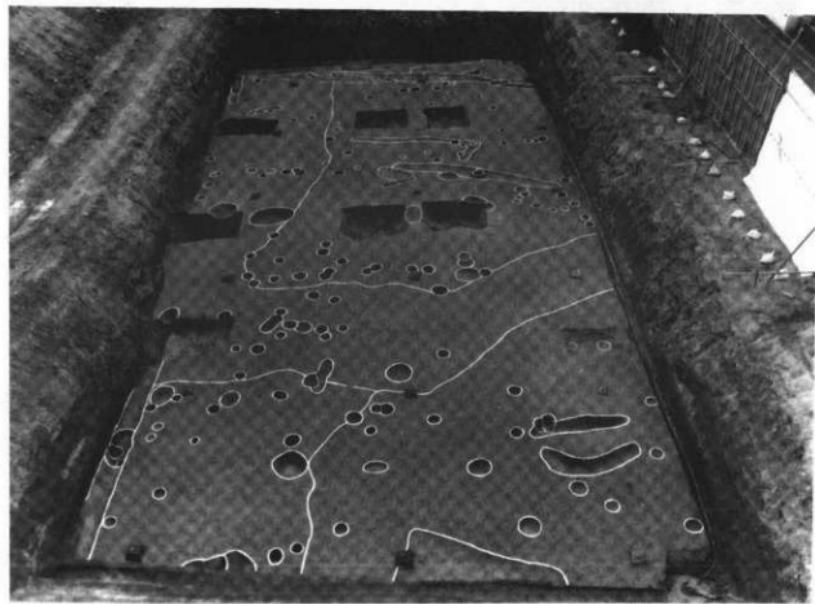


遺構完掘状況全景（南から）

第73図 東奈良遺跡（HN07-2）発掘写真（1）

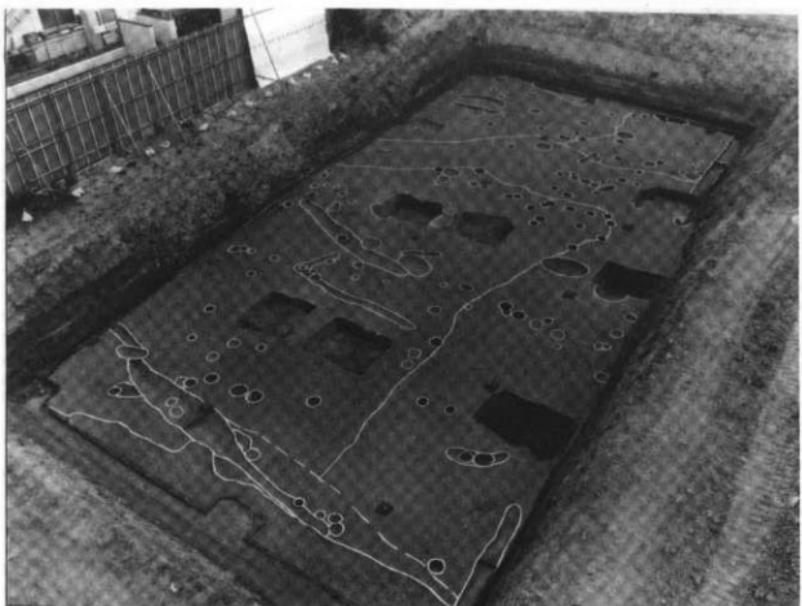


遺構検出状況全景（北から）

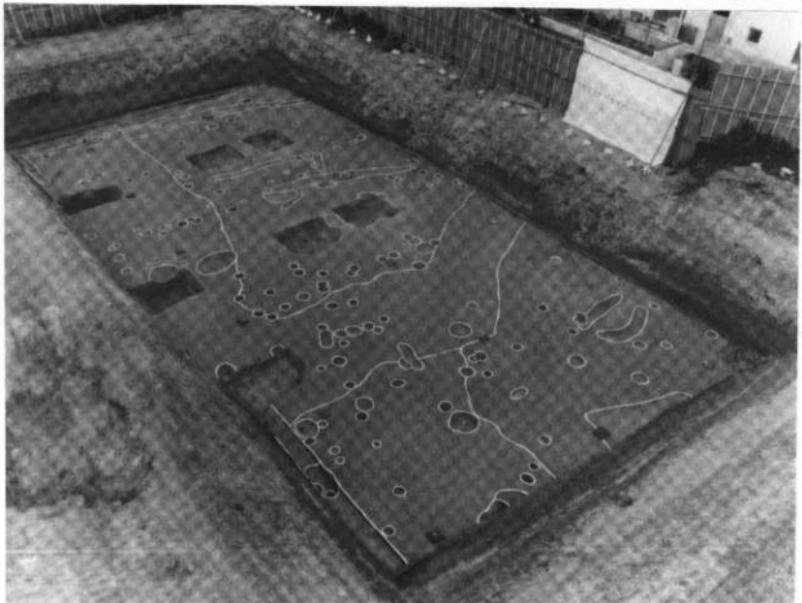


遺構完掘状況全景（北から）

第74図 東奈良遺跡（HN07-2）発掘写真（2）



遺構検出状況全景（南東から）

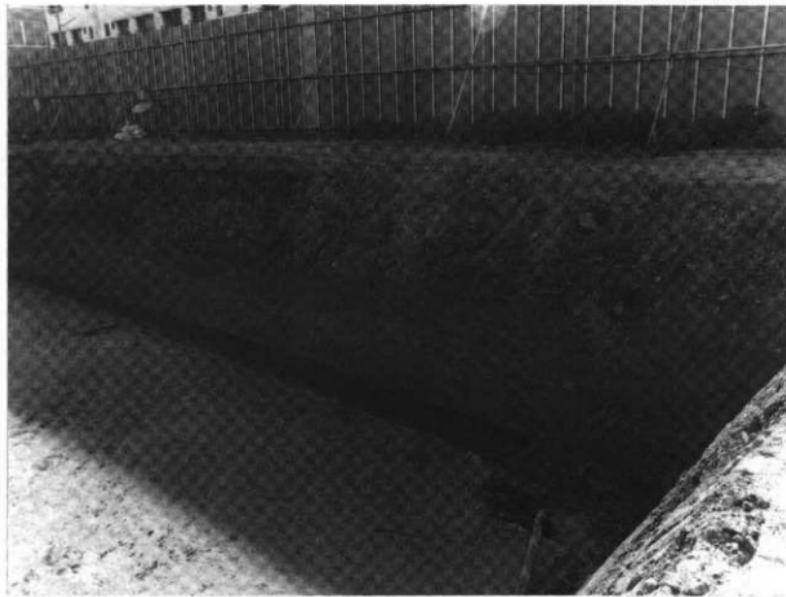


遺構検出状況全景（北東から）

第75図 東奈良遺跡（HN07-2）発掘写真（3）



調査区西壁断面（南東から）



調査区南壁断面（北東から）

第76図 東奈良遺跡（HN07-2）発掘写真（4）

東奈良遺跡

所在地 茨木市天王一丁目220番地

調査理由 マンション新築工事

調査期間 平成19年11月12日

～平成19年12月14日

調査面積 約 333 m²

調査担当 中東 正之

調査結果 東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。その中心域は、阪急京都線とJR貨物線が交差する付近を中心とした半径150m程の規模の弥生時代前期から古墳時代前期の環濠集落である。遺跡の包囲範囲は南北約1.2 km、東西約1kmに広がつ

ており、本調査地の位置する西側地区では大正川までを西限域としている。当地付近で発掘調査に至った例では、昭和51年、当地北側のヤナセ株の倉庫建設に先立つ調査で、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭(庄内併行期)の方形周溝状遺構、古墳時代後期の溝状遺構などが検出されており、当該期の墓域を示すものと推測されている。

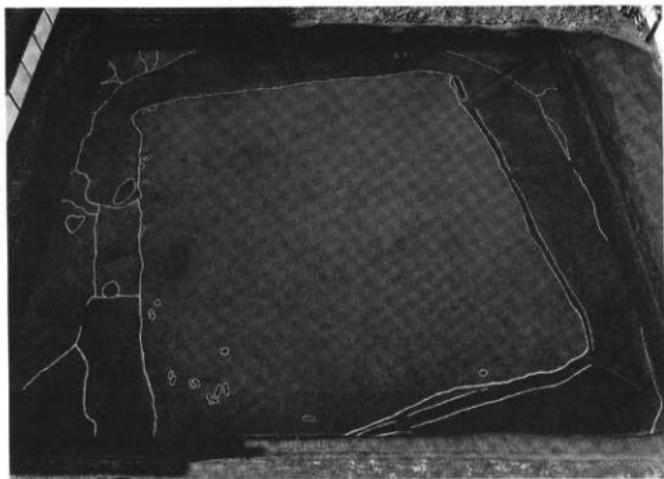
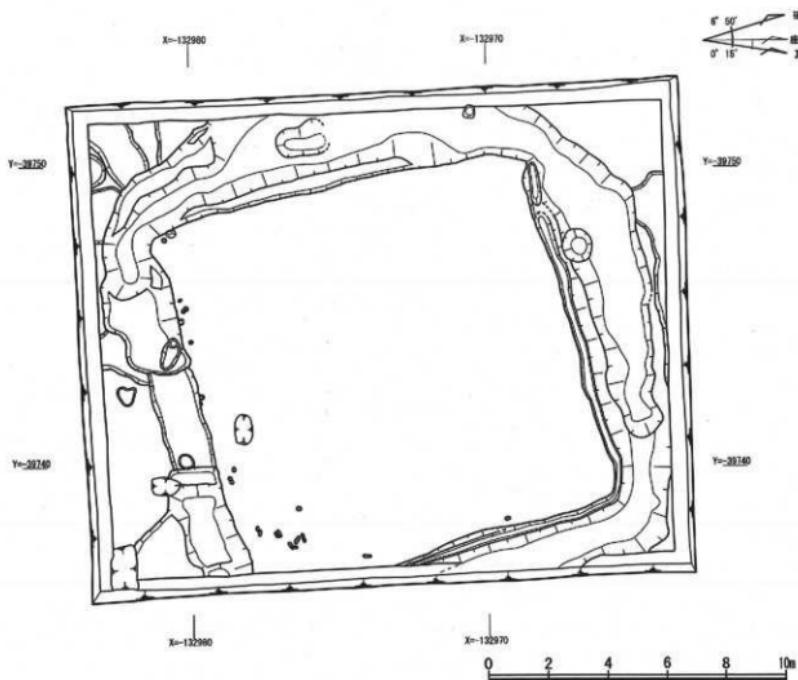
基本層序は上層より、現耕土および床上が約0.2m、灰色シルト・灰黄色シルトなどが約0.4m、褐灰色土が約0.1m、第1検出面(T.P.8.4m付近)の暗褐色粘質土(弥生時代から古墳時代後期の遺物をわずかに含む)で0.1～0.15m、第2検出面(T.P.8.3m付近)の明黄褐色土となる。

第1検出面では、全域で南北・東西方向の小溝群を検出した。中世以降の耕作に伴う遺構と判断される。第2検出面では、古墳時代後期の埋没墳(方墳)を検出した。周溝を含めた規模は調査範囲を超えていたため不明であるが、墳丘(周溝内法が囲む範囲)は一边が12.5mの方形を呈し、主軸はN13°Wにとる。周溝の幅は2～3m程度、深さ0.1～0.2mを測り、北辺と東辺の内法に沿っては幅0.3m、深さ0.15m程度の小溝が廻る。南辺中央には陸橋部とみられる途切れがあり、南側に開く横穴式の主体部を有していた可能性がある。しかし、墳丘部は完全に削平されており、主体部痕跡はまったく読み取れなかった。また、石材・木材などの構造を示す出土物もなかった。周溝内はおもに黒褐色土が堆積するが、下部は砂を含みながら粘性を示すため上下に分けられる。上下層ともに弥生土器や土師器の摩滅した細片のほか須恵器片が出土したが、埴輪などはなかった。指標となる須恵器片には、6世紀初頭頃の高杯短脚、壺蓋、壺のほか、6世紀末から7世紀初頭の壺身などがある。これらは層位的には分けられなかったが、西辺周溝のかかる断面付近での出土が比較的多かった。

元茨木川右岸地域では、春日・駅前・中条小学校各遺跡において庄内併行期の周溝墓群および古墳時代後半期の群集墳からなる遺構群が確認されており、地域の墓域の特徴を示す。当地においても古墳時代後期の方墳を確認し、当地北側のヤナセ株倉庫での調査結果とあわせると、時期や特徴が似た遺構群のひとつであると推測される。当地周辺には他に古墳が埋没している可能性が高く、今後の周辺の調査の成果に期待したい。



第77図 位置図



第78図 東奈良遺跡遺構平面図・全景

報告書抄録

ふりがな 書名	おおさかふいばらきしへいせいじゅうきゅうねんどはくつちょうさがいほう 大阪府茨木市平成19年度発掘調査概報							
副書名	平成19年度(2007年度)							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ書								
編著者名	宮藤薰・中東正之・黒須靖之・宮本賢治							
編集機関	茨木市教育委員会							
所在地	567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
德積庵寺	上穂積二丁目 1201	27211	43	34°49'26"	135°33'28"	20061215~ 20060202	1,077	マンション 新築工事
宿久庄	豊原124	27211	59	34°50'20"	135°32'46"	20061218~ 20070201	660	マンション 建設事業
東奈良	若草町 375,377	27211	55	34°48'13"	135°33'55"	20070105~ 20070331	1,033	マンション 新築工事
純持寺	純持寺一丁目 380-3	27211	32	34°49'41"	135°34'52"	20070116~ 20070209	203	マンション 新築工事
郡	上穂積四丁目 1-37	27211	35	34°49'36"	135°33'41"	20061213~ 20070202	498	マンション 新築工事
上中条	駅前四丁目 7-83	27211	56	34°49'8"	135°34'4	20070821~ 20071009	545	マンション 新築工事
東奈良	若草町279-1 ほか	27211	55	34°48'15"	135°33'53"	20070105~ 20071115	240	マンション 新築工事
東奈良	小川町967-2	27211	55	34°48'35"	135°34'08"	20071029~ 20071201	480	マンション 新築工事
東奈良	天王一丁目 220	27211	55	34°48'35"	135°34'08"	20071112~ 20071214	333	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
德積庵寺	寺院跡	奈良時代 平安時代中期	掘立柱建物跡 濃 土坑 柱穴	赤土器 穀恵器 平瓦(7世紀後半 12~13世紀の瓦) 土器 黒色土器	德積庵寺開闢			
宿久庄	集落	弥生時代~ 室町時代	濃 上坑 柱穴 堅穴住居 挖立柱建物	弥生土器(前期) 瓦 青磁器				
東奈良	集落	弥生時代中期~ 鎌倉時代	弥生時代中期の方形周溝墓 群 墓塚4条 室内式餅行期 大袋(土器)	弥生土器(前期~後期) 石器 木製品 土製品 穀恵器 土師皿	東奈良遺跡の痕跡集落 規模と周辺地域の様相			
純持寺	集落	绳文時代~ 中世	弥生時代の構群 古墳時代の大墓 古代~中世の掘立柱建物跡	縄文土器 弥生土器 土師皿 黑色土器 須恵器 石器(骨介)	縄文土器出土 および遺構面4面			
郡	集落	飛鳥時代 奈良時代	掘立柱建物跡 濃 土坑	土師器 須恵器 瓦	岐下郡衙開闢			
上中条	集落	古墳時代	濃 柱穴	土師器 須恵器				
東奈良	集落	弥生時代~ 平安時代	弥生時代中期の 方形周溝墓2 土坑墓1 飛渡1	弥生土器 土師器 須恵器 黑色土器 瓦器	弥生時代中期の痕跡 (集落拡大)			
東奈良	集落	弥生時代~ 鎌倉時代	古墳時代の構 柱穴 鎌倉時代の柱穴群	弥生土器 土師器 須恵器 土師皿				
東奈良	集落	古墳時代 中世	古墳時代後期の方墳 中世以降の耕作跡	弥生土器 土師器 須恵器				



平成19年度発掘調査概報

発行日 平成20年3月31日

発 行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社 トウユー